

ISBN978-4-938403-27-0

C0045 ¥1800E

定価 本体**1800**円+税

特定非営利活動法人
朝倉川育水フォーラム



朝倉川の水の育てかた

朝倉川とともに…
子どもたちの体験を持続可能なチカラに…

朝倉川
育水フォーラム

朝倉川の 水の育てかた

朝倉川とともに…

子どもたちの体験を持続可能なチカラに…

特定非営利活動法人
朝倉川育水フォーラム

朝倉川流域ビジョン
2025

「育水」という想い・・・

平成7年の設立以来、私たちは、「治水・利水、親水を経て、多様な植物や生き物を宿す水を育むために、人や社会ができることを少しずつでも積み重ねていく」という理念、そして、その理念に基づいた活動を大切にしてきました。そして、その理念を「育水」と名付け、その名のもとで様々な活動をして参りました。

世の中には、「教育」を始めとして「知育」「徳育」「体育」など様々な「育てる」にまつわる言葉があります。しかし、その多くは「人」を対象にすることばです。日本ではあまりなじみは無いようですが、中国には「水育」という言葉もあるようです。これも、水を大切にするための教えを通じて、「人を育てる」という意味があるそうです。

私どもの活動の理念である「育水」は、「水を育てる」ために、出来ることをやっていくという活動そのものを表しています。もちろん、「水を育てる」ための「人を育てる」活動もその中に入っています。そのような、ことばに想いを込めながら、「育水」という言葉そのものの普及も含め、持続可能な社会を目指して活動を進めてまいります。

また、私たちは特定非営利活動法人としては珍しいかもしれませんが、この理念を守るために、平成23年3月に「育水」ということばを商標登録(登録第5400882号)させていただきました。

- 平成30年、山梨県と「育水」に関する共同利用の協定を締結。
山梨県で9月19日を「育水の日」として制定されました。
- 令和3年、愛媛県西条市と「育水」に関する協同利用の協定を締結。

もくじ

「育水」という想い	1
はじめに	4
「朝倉川の水の育て方」発刊にあたって	5
寄稿: 多米の里山づくりを楽しむ会 大木伸浩様	6
寄稿: 多米校区自治会 川本恭久様	7
愛すべき地域の生き物図鑑	8
● ゲンジボタル	9
ゲンジボタル秘伝の書(多賀谷流)	13
● 魚類	18
環境DNAによる朝倉川の魚類調査報告	46
● 甲殻類	50
● その他、川の中で見られる動植物	57
● 両生類	66
● 爬虫類	120
● 昆虫	134
● クモ類(ムカデ綱及びその他動物)	232
● 陸産貝類及び軟体動物	250
● 植物	256
寄稿: 株式会社サンルイ・インターナショナル 森田敦子様	279

朝倉川との30年… 「育水」という想い…	280
朝倉川流域ビジョン2025	289
～持続可能に向けてのこれからの10年	
朝倉川育水フォーラムの活動	292
1. 生物多様性のためのビオトープづくり	293
2. 森に親しむための里山づくり事業	294
3. 朝倉川美化事業(朝倉川530大会)	295
寄稿: Little by Little 多米530運動部 和田蒼平様・友永英雄様	296
4. 水辺の緑の回廊事業(植樹メンテナンス大会)	297
寄稿: ワルツ株式会社 片桐鉄也様	298
5. 朝倉川調査研究事業	299
6. ホタル飼育ネットワーク事業	300
7. 青少年育水事業	301
寄稿: 学校法人桜丘学園 満田康一様	302
8. 絶滅危惧種川ガキ再生事業	303
9. 連携事業	304
寄稿: 株式会社紅久 三浦裕司様	305
10. 協力団体・関連団体・所属団体	306
11. 組織基盤の強化	308
12. 広報・PR啓発事業	308
13. 朝倉川に願いを込めて	309
終わりに・謝辞	310
30年の歩み(年表)	311
参考文献	315
図鑑索引	318
執筆者一覧	322



はじめに

朝倉川は、豊橋市の東部弓張山地に水源を持ち、比較的人口の密集する東部の市街地を西方に流れ、豊川下流部に注ぐ流域面積17km²、流路延長8.63kmの一級河川です。

平素は、朝倉川育水フォーラムの運動や活動にご協力をいただき、誠にありがとうございます。朝倉川育水フォーラムは、多くの市民の皆様のご協力のもと、平成7年の設立以来30年目の活動を迎えることができました。その間私たちは、「治水、利水、親水を経て、多様な植物や生き物を宿す水を育む為に、人や社会が出来る事を少しずつでも積み上げていく」という理念、そして、その理念に基づいた運動や活動を大切にしてきました。そして、その理念を「育水」と名付け、その理念を形にするため、朝倉川流域において環境を切り口としたまちづくり、運動や活動を展開しています。

もちろん、その中にはそういった運動や活動ができる次代を支える「ひとづくり」も「絶滅危惧種川ガキの再生」というメッセージとともにを行っています。

朝倉川育水フォーラムでは、ゲンジボタルを天蓋(てんがい)種(umbrella species)として活動しています。ホタルを中心に考えることによって「害(虫)」とか「益(虫)」という概念が初めて生まれ、ホタルを中心とした健全な食物連鎖がうまく回るような環境づくりをしています。

さらに、この「害」とか「益」という概念の根底には人間生活の利便性や快適性という言葉が本質的に含まれています。もちろん、利便性や快適性も大切な要素です。だからこそ、「ひと」の問題として環境問題を捉えることが必要だと思っています。

環境に関する活動は、そこに関わる人たちが、少しずつ「気づかい」という持ち出しを自然環境や人間社会に対して継続的に行うことによって成し得るものだと思います。

そんなゲンジボタルを育みつつ生物多様性を図り、より良い自然と都市との共生を模索しながら進めています。今回多くの皆様に「朝倉川の水の育てかた」という形で私たちのメッセージをお伝えできれば幸いです。



特定非営利活動法人 朝倉川育水フォーラム

第4代理事長 大谷忠興

「朝倉川の水の育てかた」 発刊にあたって

本書の発刊にあたり大切にしたのは、朝倉川育水フォーラム設立30年のこれまでを振り返るとともに、未来に活かすという想いです。

私たちの活動をより多くの皆様に知っていただき、共感していただき、「育水」の理念に基づく運動や活動を前進させることができればと思っています。その前進の中には、自然や生き物に興味を持っていただき、それを端緒として自然や生き物を大切にする人や、より良い自然と都市との共生について考える人を増やすという大切な要素も含まれています。

私たちが暮らすこの地域では、絶滅が心配される生き物たちも残念ながら沢山います。本書では、そういった貴重な種を次代につないでいくこと、また、日常生活をする中にいる身近な生き物たちにより親しみをもってもらうことを目的に、図鑑に多くの頁を割くこととしました。私たち朝倉川育水フォーラムの会員が、30年にわたるフィールドワークを通じて出会った、朝倉川流域や豊橋市、東三河で生息する愛すべき生き物を紹介する図鑑とし、豊橋総合動植物公園のんほいパークの皆様、愛知教育大学の島田知彦先生に調査、知見等のご協力をいただき、完成することができました。

また、当法人の現在の活動にも触れ、記録として残したいと思います。30年間の活動に関わっていただいた全ての皆様への感謝の気持ちや、その方たちの活動への想いを忘れることなく、生命にとってかけがえのない存在である「水の育てかた」が未来へ向かってより多くの人に伝わることを願っております。



▲「井原第二公園まちなかビオトープ」
地下水を汲み上げて利用しています。





多米の里山づくりを楽しむ会
会長 大木 伸浩

里山はかつては薪や肥料、木材、食料の供給源として人々の生活に密着した存在でした。それ故適切な管理もされ、健全な状態が保たれてきました。しかし人々の生活様式が変わり、里山は人々の生活から離れた存在となってしまう、人の手も入らなくなり荒廃してしまいました。多米の里山づくりを楽しむ会ではそういった里山に新しい価値を見だし、従前とは違った方で人々との結びつきを再構成することで里山を再生させ、また

人々や社会のウェルビーイングの向上に貢献したいと思って活動しています。

朝倉川の水源である多米の里山を守るとは朝倉川を守ることでもあり、朝倉川育水フォーラムとは創立当初より協力して活動してきました。フィールドが隣接していることもあり合同でのイベントも行っています。たとえば環境学習では朝倉川育水フォーラムが生物についての分野を担当してもらい、当会では森林に関する分野を担当するような形です。特に近年では当会の人的パワー不足を朝倉川育水フォーラムの皆さんが積極的に補ってくださっています。また朝倉川育水フォーラムとしても活動範囲が広がり観察／保護する生物も多様化するなど、Win-Winの関係を強めているところです。今後より一層の発展的な取り組みができるよう協力していきたいと思います。



●多米の里山づくりを楽しむ会

1998年、当時の豊橋青年会議所のメンバーを中心に設立。朝倉川の水源にあたる多米の国有林を中心に活動。主な活動内容は、林内の広場や遊歩道の整備活動と自然観察会、環境学習のお手伝いなどの啓発活動。



●大木 伸浩

1963年豊橋生まれ。電機メーカー勤務、青年海外協力隊(現JICA海外協力隊)参加を経て豊橋に戻る。豊橋青年会議所在籍時に環境系の事業を担当したことをきっかけに環境保全活動に関心を持つ。多米の里山づくりを楽しむ会会長のほか、朝倉川育水フォーラム副理事長、穂の国森づくりの会専務理事。



多米校区自治会長
川本 恭久

この度は、朝倉川育水フォーラム様の創立30周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。寄稿にあたり、多米校区自治会長に就任してからの13年間の多米校区と貴法人との歩みを、大切にされている活動理念「育水」にちなんだテーマで振り返ります。

就任後、多米の校区の真ん中を流れる朝倉川を、校区以外に住んでいる貴法人の方々清掃活動や川のメンテナンスをされているのに、地元が関わらなければならない、と

いう思いで、校区全体として一緒に活動するようになりました。それによって朝倉川にも校区全体にも変化が生まれました。まず朝倉川の530運動は以前より参加者が増え、清掃区域が今までの2倍に広がりました。川がきれいになり、今では鮎の遡上が始まり、人里の象徴である蛍の数も増えました。

そしてもう一つ貴法人が大きく寄与してくださった事があります。自分達が住む街に流れる川を、地域外の人たちが想いをもって大切に管理保全し続けてきてくれた事実を、他人事ではなく、自分事として捉え関わる大人が増えたことです。今では多米校区のSDGs活動として、多米自然歩道の保全活動などいろんな広がりを見せ、その活動の中で、日本の在来種のネバタゴガエルの生息地も見つけることが出来ました。

そんな13年前より大人の変化した背中を見ながら育った子供たちが、今、主体的に530運動の活動を始め、自治会と一緒に活動しています。また、その下の学年にも引き継がれています。

その子供たちが生まれたのは、ちょうど13、4年前。子供たちの成長していく風景の中に、朝倉川やそこに住む生き物を大切にする大人の姿は自然に溶け込んでおり、自治会長に就任した際、地元が関わらなければ！という思いから、その志を自然と受け継ぐ次世代が生まれたことは非常に感激・感じます。

多米校区の水を育て、人を育ててくれた貴法人に感謝と敬意を表するとともに、未筆ながら、朝倉川育水フォーラム様の一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

愛すべき地域の生き物図鑑

朝倉川育水フォーラムは、目指すべきビジョンの共有と運動や活動への共感を図るため、～ホタルのとびかう人里づくり～というターゲットを掲げています。

ゲンジボタルは健全な清流や里山の分かりやすい環境指標生物です。ゲンジボタルを増やそうと思えば、その幼虫の餌となるカワニナを増やす必要があり、そのカワニナを増やそうと思えば河川を綺麗にする必要があります。その綺麗な河川を維持しようと思えば、水源付近の里山や河川沿いの環境整備にも触れる必要があり、その河川の状態を継続的に把握しておくことも重要になってきます。また、ゲンジボタルは幼虫から成虫へと変態する蛹室を造るために上陸するので、陸地環境も重要で、繁殖のために空中に舞う空の環境も大切です。

そういった生活史から、水、土、大気など、我々が暮らしていく上においても、とても大切にしていかなければならない要素を過分に含んだ、親しみを覚える環境指標生物としてゲンジボタルをシンボリックに取りあげています。

そして、そのゲンジボタルのためにできること、これを事業化したものが、当法人の年間を通じた活動そのものです。その活動のフィールドでは、たくさんの動植物との素敵な出会いがあります。私たちの運動や活動、「育水」という理念が、多くのエリアに拡がることを願い、朝倉川が合流する豊川、その流域である東三河で、自然や生き物好きな会員たちが出会い、撮りためてきた愛すべき動植物を紹介させていただきます。

※当法人には、専門家や研究者は在籍しておりません。今まで撮りためてきた写真の中から厳選した約620種の動植物を紹介します。

※紹介する動植物は、豊橋総合動植物公園のんほいパークの皆様、両生類は、愛知教育大学島田知彦准教授に調査、知見等のご協力を頂きました。

ゲンジボタル

豊橋市遭遇難易度 ★★★★★



葉の上で休息をとる成虫♂

コウチュウ目、ホタル科。成虫の体長(触角を除く頭部先端から腹部先端まで)は10～20mm、オスよりメスの方が一回り大きい印象を受ける。オスは第6～7腹節、メスは第6腹節に淡黄色の発光器があり、この点でも雌雄を判別することができる。ホタルは発光昆虫だと認識する方が多いが、人間が目視で発光していると認識できるホタルは、本州では本種、ヘイケボタル、ヒメボタルの3種であり、多くのホタルの仲間は発光しない。また、幼虫時代を水中で過ごすホタルは、本州では本種とヘイケボタルの2種のみで、ホタル界にあって本種はマイノリティな存在である。本種幼虫は、ある程度流れのある清流を好み、巻貝であるカワニナの仲間をエサとして成長し、4月ごろ上陸をして蛹室を造る。その後、蛹期間約40日を経て、5月中旬から7月初旬にかけて成虫となって繁殖期を迎える。豊橋市では、里山付近の小川、朝倉川では内山川との合流点付近から上流域で観察をすることができる。例年、6月初旬にオスとメスが出会うために発光する乱舞ピークを迎えるので、ぜひ観察をしにフィールドへ足を運んでいただきたい。



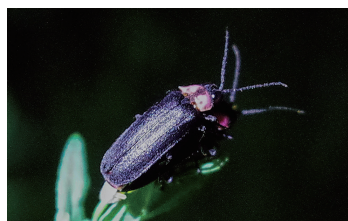
ゲンジボタルの成虫

赤い胸部(前胸背板)に黒の十字模様があるのが本種の特徴。類似種であるヘイケボタル(体長7～10mm)はI字模様で体長も一回り小さく、発光も体長に応じて小さいのが特徴。



ゲンジボタルの成虫

▲第6～7腹節の発光器が点滅する。



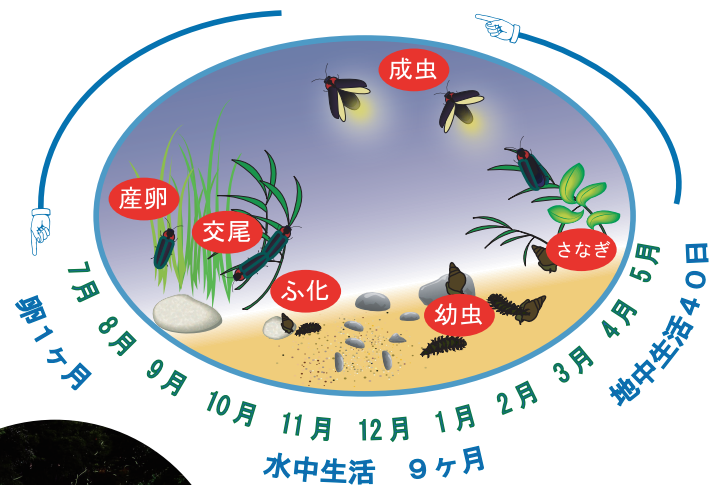
▲交尾するゲンジボタルの成虫(上)。

① ゲンジボタルより小さい類似種のヒメボタル(5～9mm)。ヘイケボタルと同等の大きさだが、フラッシュのように強く短く鮮明な濃い黄色(黄金色)に発光する。

② 発光しないホタルの代表格、オバボタルの成虫(7～12mm)。



ホタルの一生サイクル



乱舞発光の様子



▲ミズゴケ類周辺、産卵に向けて集まる様子。



▲産み付けられた卵。

産卵場所へ
集まる様子



ゲンジボタルの成虫

モノアラガイを捕食するハイケボタルの幼虫。本種とは異なり、田んぼ、休耕田、湿地などの止水環境を生息適地とし、モノアラガイの仲間を捕食対象とする。近年、農薬や除草剤の使用、地球温暖化、素掘り水路の消失など様々な要因が影響し、豊橋市内では急速に数を減らしている。



ハイケボタルの幼虫



▲カワニナを捕食するゲンジボタルの幼虫。



▲ジウカイボンに捕食されるゲンジボタルの成虫。

ゲンジボタル秘伝の書 (多賀谷式)

当法人の理事による、本種及びカワニナの飼育記録や養殖方法を記載しています。ゲンジボタルを回復させたい想いから、様々な試行錯誤を繰り返してノウハウを積み重ね、独自に東三河で再現性の高い手法を確立しました。地域で本種の生息が危ぶまれて回復のスパイラルに乗せたい場合や、生息地におけるバックアップとして必要な場合などにご活用ください。当該河川現地での成虫採取、採卵、飼育、放流を基本とし、他地域に由来する本種の放流は行わないようにお願いします。遺伝的にみると地域ごとに差異があり、西日本や東日本、一部の離島では発光点滅時間が異なるなど、大きな時間軸でみると地域ごとで進化分化の途中にあります。取り組む前に、地域の専門家や市町村環境保全に相当する部課との連携を推奨します。また、本項でもあるように、エサとなるカワニナを当該河川で大量に採取すると、本種自然個体群、ひいては生態系全体に影響が出ると考えられます。必ずセットでカワニナの繁殖と養殖も行なってください。養殖と放流は本質的な問題の解決にはなりません。並行して地域民とも連携し、水をはじめとする本種の生息地の環境を健全な状態へと整えていくことが、問題解決に対する急所となります。皆さまの地域で、ゲンジボタルの乱舞が恒久的に観られる一助となれば幸いです。

資料提供 多賀谷 碩信

協力・写真提供 豊橋市立高山小学校

ゲンジボタルの飼育秘伝の書

多賀谷式「コンテナ循環浄化冷却法」

多賀谷式「コンテナ循環浄化冷却法」は、多賀谷彌津悦氏がゲンジボタルを愛し、この地域でホタルが飛び交う風景を目指し、長年の研究を積み重ねて完成させました。ゲンジボタルの場合、自然界におけるホタルの生存率は、卵から幼虫になるまで約5%程度と言われています。この飼育法では、ホタルのふ化・成長に適切な環境を提供することで、生存率を30～50%程度まで高め、より多くのホタルの幼虫を川へ放流することを目的としています。

飼育スケジュール(幼虫まで)

5月下旬～6月上旬

6月中旬～7月中旬

7月下旬～3月上旬

●ホタルの成虫採取

●産卵・ふ化

●幼虫の飼育期間

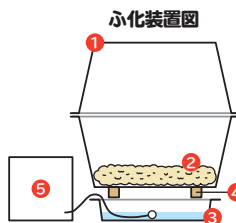
●ホタルの幼虫の餌となる
カワニナの採取

※11月下旬～2月下旬まで冬眠

ゲンジボタルふ化装置の作り方

- 材 料 -

- ① 水切りかご
- ② 水ゴケ
- ③ パレット
- ④ 木材
- ⑤ エアポンプ

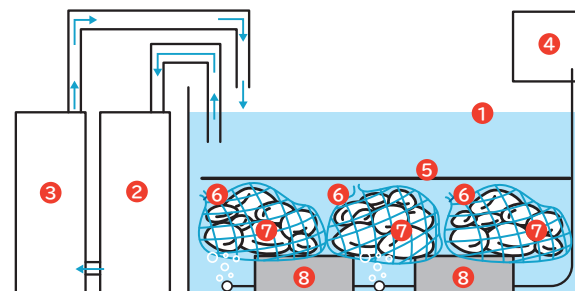


▲高山小学校のふ化装置

PONT

ふ化した幼虫は水場を求めてウロウロします。長時間水場に辿り着けないと死んでしまうので、幼虫が水切りかごの隙間から、水を張ったパレットに落ちやすいようにしてやります。また、直射日光は避け、日陰の風通しの良い所で管理することが大切です。

ゲンジボタル飼育装置の作り方



- 材 料 -

- ① 水槽
- ② ろ過器
- ③ 冷却機
- ④ エアポンプ
- ⑤ 金網
- ⑥ 洗濯ネット
- ⑦ 白玉石
- ⑧ コンクリートブロック

PONT

エアポンプのビニール管は底のコンクリートブロックの穴に全て通し、底から酸素が噴き出すようにすることで、水槽内に人工的な川のせせらぎをつくります。採取したカワニナは水槽のなかで繁殖します。その際、白玉石とコンクリートブロックに含まれるカルシウムがカワニナの繁殖・成長を促します。

事前準備の流れ

飼育装置の準備 ▶ カワニナの採取 ▶ ふ化装置の準備 ▶ ホタルの成虫の採取



▲高山小学校での準備の様子

カワニナの採取と飼育

川からカワニナを採取 (5月下旬～6月上旬)

- ホタルの幼虫の飼育には大量のカワニナが必要です。約4.5kg、2000個ほどのカワニナを採取します。
- 採取したカワニナには、プラナリアやヒル、殻に付着した汚れを取るため、金たわしなどで丁寧に洗い、水でよく流します。
- 洗い終わったカワニナは、事前に準備しておいた飼育装置に全て入れます。



▲カワニナを洗う様子。

カワニナの飼育 (5下旬～翌年3月上旬)

- カワニナは自然界では雑食です。飼育環境下では、農薬の影響が出ないように洗ったキャベツなどの葉物野菜を与えます。
- カワニナは飼育水槽の中で繁殖します。ゲンジボタルの幼虫は、主に生まれてきた稚貝をエサとして成長します。



▲金網に固定されたキャベツ。

ホタルの成虫採取～産卵ふ化

ゲンジボタルの成虫採取 (5下旬～6月上旬)

- ゲンジボタルの成虫は、オス20匹、メス20匹程度を採取します。メスはほとんど飛翔しません。川のせせらぎ近くの草などに留まっていることが多いです。

産卵・ふ化 (6月中旬～7月中旬)

- 採取したホタルは、う化器に敷かれたミズゴケに卵を産みます。
- 水ゴケは霧吹きを使って絶えず湿らせた状態を保ちます。
- 10日間くらいかけてメス1匹から500個から1000個の卵が産み落とされます。
- 30日ほどするとふ化して「ふ化装置図⑤」のバットの中に落ちます。
- バットの中に落ちた幼虫は、衰弱するのを防ぐために、すぐに水槽の中に静かに入れます。

幼虫の飼育 (7月下旬～3月上旬)

- 幼虫の飼育中はろ過器のフィルターをこまめに清掃します。水が汚れるとカワニナの生育に影響をきたし、ホタルの幼虫の生育不足にもつながります。
- 飼育水槽の水温は常に19℃～23℃を保つようにします。
- 飼育水槽の水は月に一度半分の量を新しい水に取り替えます。
- 幼虫は飼育中、石の隙間に隠れているため、ほとんど姿が見えません。

ホタルの幼虫の放流

ホタルの幼虫は11月下旬から2月末まで冬眠するため、放流の時期は、

10月下旬から11月上旬(秋放流)

翌年3月中旬(春放流)に行います。



嵩山小学校で実施された放流の様子(11月)

- ホタルの幼虫は冬眠が明けると陸地へ上陸を始めます。その後、土の中で約50日間過ごしてサナギとなり、成虫として約10日間飛翔します。

コナラの芽生え

一つは緑、もう一つは赤。なぜこんなに違う色なのだろうか？天然のクリスマスカラー。メリークリスマス



苔と茸

今はやりの苔、滝ノ谷ピオトープにはいっぱいあるよ！



株式会社サンルイ・インターナショナル

代表 森田 敦子

植物を語る上で欠かせない事！それは特徴ある土壌です。

東三河を通る大断層である中央構造線をご存じでしょうか！中央構造線の歴史は日本列島の誕生以前にさかのぼります。

一億年前の海洋プレートが北に向かって動いていた際、大陸プレートの東端が北に引っ張られ巨大な横ずれ断層が出来ました。これが後の中央構造線です。初めに発見したのはドイツ人の地質学者エドムント・ナウマン。地質調査をし、その特徴として日本海側の断層を内帯、太平洋側を外帯と呼び土壌の成分も色も特徴も全く違う地質の境界線があるのです。

内帯は白亜紀にマグマが上昇した地帯、外帯はマグマが上昇しなかった地帯です。

その特徴ある中央構造線が東三河の土壌の特徴を担っているということが面白い点です。その中の一つ特徴ある岩石はマイロナイトと言います。地温が高く深部にあった時、焼かれてゆっくりと変性していった断層岩。他にも特徴のある岩石やその成分は土壌を特徴づけています。

植物は光合成をし、太陽のエネルギーとH₂O水とCO₂二酸化炭素そして土壌からミネラルや大切な成分を吸収して糖グルコースをつくり成長しています。土壌の成分は土の中に生きている微生物の力が欠かせません。植物が元気に成長していく目的は種の保存です。その為に土壌から吸収する成分は花を咲かせ、実をつけて種をつくる時に大いに活躍をします。同じ種類の種であるとしてもどこの土壌に生育するかで植物の成分も大きく変化するのです。

光合成では植物の病気の大元を治療する成分と土壌の成分と化学反応を起こして薬を作ってしまう植物(薬草)も多く存在します。私たち人間も多くの植物(薬草)のお世話になっています。薬理効果のある植物はどの土壌で生育したかが成分を決定します。

東三河の中央構造線地域に生育する植物をより成分から学ぶと、土壌と切り離せないことが分かりとても興味深いです。

●森田 敦子

客室乗務員時代にダストアレルギー気管支喘息を発病したことがきっかけで、植物療法(フィトセラピー)に出会い没頭。フランス国立パリ13大学で植物薬理学を本格的に学び、症状が改善。帰国後は、植物療法に基づいた商品とサービスを社会に提供するため会社を設立。フェムテックの先駆けとなるフェムケアの啓蒙活動も行う。

朝倉川との30年…「育水」という想い…

朝倉川は豊橋市の東部弓張山地に水源を持ち、比較的人口の密集する東部の市街地を西方に流れ、豊川下流部に注ぐ流域面積17km²、流路延長8.63kmの一級河川です。

そして、平成7年の設立以来、その朝倉川を中心にわたしたちは、「治水・利水、親水を経て、多様な植物や生き物を宿す水を育むために、人や社会ができることを少しずつでも積み重ねていく」という理念を「育水」と名付け、その理念に基づいた活動を大切にしてきました。

私どもが、1993年9月に発行されました豊橋商工会議所100周年記念誌「界を超えて」の中で、「これからは、企業も社会に向けて何か具体的な働きかけを…、それには身近な環境を通じて社会に働きかける仕掛けが大切である。」という動きをもとにNPO活動をスタートしてから、30年の歳月が経とうとしています。

※以下は、1992年に発行された豊橋商工会議所100周年記念誌「界を超えて」のP125に記述されている内容です。

(3) 朝倉川を昔の川に戻すプロジェクト

朝倉川の水の浄化をはかり、トンボや蛍の飛び交う昔の川に戻していくプロジェクトを展開する。

朝倉川は、豊橋の自然の宝庫である多米山間部、葦毛湿原を源流に持ち、豊橋の北部市街地を流れる清流である。このように、豊橋市内で完結している朝倉川の状態は豊橋の自然環境を象徴しているといえる。この川の水質が主に流域の住民による生活排水などにより、かつての水準に近く、例えばBOD観測値平均は2.9mg/(平成3年度)で、これは生活環境の保全に関する環境基準のBランクに該当する数値である。その他の数値も含めてAAランクにもっていくことが望ましい。

- コンクリート三面張りの部分は出来るかぎり自然の護岸とし、緑を多く植え、自然の浄化作用を増進させる。
- 生活排水をできるだけ流さず、流す場合は汚染された水は流さない。そのために、下水道の敷設、合併浄化槽の普及を促進する。
- また、流域の住民による中性洗剤や廃油を流さない運動、流域住民だけでなく、小中学校や経済団体などとともに、川の530運動などを推進する必要がある。条例による対応も検討する。

(4) 柔らかな都市基盤の導入

- 水をはじき押し流すコンクリート、アスファルトだけで都市を造るのではなく、水を吸収したり、草の生えたりする柔らかな素材をできるだけ使用して都市基盤を整備する。道路、歩道、駐車場、人工地盤などの素材は現在開発されているものを活用するが、新素材の開発を地域の高度技術応用プロジェクトとして展開していく。

この30年の間、「育水」という理念を大切にしていけるとともに、私たち自身、そして、未来を担う次世代の子どもたちが、自然環境の中で「自分自身の目で見て、手に触れる…」というリアリティを大切にしてきました。2002年の秋からスタートした年間4回の朝倉川河川調査や滝ノ谷池ビオトープでの活動もその一つです。

そのような、リアリティを感じながらも「水」と「人間社会」を取り巻く関係性は、かつて高度経済成長時代に大きく取り上げられた「水質」といわれる「水」そのものの汚染の課題から、海洋中のマイクロプラスチックなどの新たな課題はあるものの、気候変動による豪雨、地下水や老朽化した上下水道に起因する内水反乱と言われるような水循環に関わる課題の顕在化というような変化をしてくれています。

水循環という視点で考えれば、通常の生活圏での海も含めた水平的な水循環のみを考えれば良いという時代は終わり、垂直的な循環も視野に入れながら、グローバル化と共に企業立地など産業用の利用についても、目を向けていかなければなりません。

特に地表の水利用だけであれば、大きな影響は無いかもしれませんが、地下水の大規模な汲み上げなどによる地盤沈下などの地形の変化や、地下水脈の封鎖によって下流地域への利水への影響、上下水道の老朽化にともなう地下水への影響など、法的な整備の必要なところは数多くあるように感じられます。

このように自分たちの身の回りの「水循環サイクル」が変化してしまった結果が、「目先の生活の利便性を求めた結果、人間自身がやったこと」であったり、「川で遊ぶと叱られる」というような、責任回避型の正常性バイアスに起因しているのだとすれば持続可能な「水循環」になるような社会に向けて私たち自身がやっていかなければならないことがあるはずです。

設立のきっかけとなった、32年前の豊橋商工会議所による環境保全活動の具体的な提案においても、「川の530活動の推進」については、現在の朝倉川530大会として市民に定着していますし、「柔らかな都市基盤の導入」についても、グリーンインフラの概念に近いものであり、制度的なもののみならず、「一人一人が、今すぐにでも出来ること…」を運動として提案出来ることはあるはずです。

私どもの活動の理念である「育水」は、「水を育てる」ために、出来ることをやっいていくという活動そのものを表しています。もちろん、「水を育てる」ための「人を育てる」活動もその中に入っています。そのような、ことばに想いを込めながら、「育水」という言葉そのものの普及も含め、子どもたちの体験を持続可能なチカラにしていくことで次世代へつなげる社会を目指して活動を進めていきます。

朝倉川流域ビジョン2005そして 2015の評価と検証

「朝倉川流域ビジョン2005」の作成当時、朝倉川を取り巻く課題として次の6つの提言をさせていただきました。

1. 水の枯渇と多雨時の鉄砲水の危険性がある
2. 生活雑排水、尿尿系排水、農薬などの流入により水質の悪化が懸念される
3. 夏期の水温上昇(無植栽、コンクリート護岸による輻射熱、溜め池での長時間にわたる水の滞留などによる)とそれによる溶存酸素の減少が危惧される
4. コンクリート護岸により、多くの水生生物の生息可能性が阻害されている
5. 落差工により、魚類の上下流の移動が妨げられている
6. 夜間照明により、ホタルを始めとする生物のバイオリズムが狂わされている

更にその10年後に現状の課題に基づいた四つのアクションプランを流域ビジョン2015として提言させていただいています。

1. 朝倉川530大会・朝倉川植樹メンテナンス大会など地域市民参加型環境啓発事業の継続(4-2、4-3)
2. 河川調査を中心とした、環境(水質・生態系etc)のモニタリングの継続実施(4-4)
3. 絶滅危惧種「川ガキ」の再生に向けての制度づくりへの提言(4-1、
 - 子どもたちの体験を支えるための包容力ある社会の実現
 - 滝ノ谷池ビオトープを中心に子どもたちの体験活動の実施
 - 子どもたちの豊かな体験を育む環境を支えるための「子どもの未来を支えるための理念条例」の制定
4. 地域の人たちが自分たちの「水」を支えるための「水循環条例(理念条例)」の制定(4-5)
 - 世界に数少ない「水道水を飲める国」としての誇りと保全に対する気持ちの醸成
 - 文明の進化などによって、早められてしまった水循環を適正な速度にするための具体的な事例の推進(個人、事業者、行政のそれぞれのセクターに対して)
 - 利便性によって損なわれた水環境を再生するための代償制度など

それぞれの内容についても、この20年間での社会環境の変化も含め一つずつ評価していきたいと思います。

2005-1. 水の枯渇と多雨時の鉄砲水の危険性がある

かつて、「ゲリラ豪雨」という言葉をよく耳にするようになった…と言うような状況は、今や定着したようにも感じるようになりました。線状降水帯などの気象情報を的確に把握しながら、予防的避難のように経済活動も含めた生活の安全を守るというような状況は当たり前にはなりませんが、かつての状況からも予報精度以外においては「改善した」とは言えない現状にあります。そしてその現状に対しては、「身近な水循環の速度が生活に影響を与えるほどに速くなっている…」と考える必要があるのではないのでしょうか。

確かに、水の循環に関しては海洋・大気・河川などの表面的な循環のみならず、地下水やそれに関わる上下水道設備や様々な構造物などの社会インフラに至る様々な要因が複雑に絡みあっています。

また、中山間地を中心とした森林の水源涵養機能の保全の必要性についても重要なことに違いはありませんが、川の氾濫による下流部の都市化の保全を最重点とした治水方針については、人口の都市部への集中による森林の荒廃、クルマ社会への対応や除草などの日常生活への負担の軽減など様々な理由で、表土をアスファルトやコンクリート、さらには様々な構造物が出来てきたことで「地中」という水の逃げ道がなくなっていくことによる下水道などへの負担増加と老朽化、大規模構造物の地下水脈への影響に関する社会的認知の低さと法整備の遅れなど、残念ながら課題は増える一方といわざるを得ません。

設立当時に提唱させていただいた「柔らかな都市基盤の導入」についても、グリーンインフラの概念を導入することで、行政に任せるだけでなく、地域に住まう一人一人ができることを提案していくことで、一つの運動につなげていくことの必要性を感じます。

グリーンインフラ運動が実践されることで、治水面での効果のみならず、ヒートアイランド対策にもつながるといふ相乗効果も期待されます。

2005-2. 生活雑排水、尿尿系排水、農業などの流入により 水質の悪化が懸念される

河川の水質という面から言えば、水温以外については継続的な水質モニタリング調査の結果と照らし合わせてみても、「良い状態で、安定している」と言えます。

このような結果については、行政主導による下水道整備および浄化槽設置促進の結果であることはもちろんのこと、長年にわたる朝倉川530大会の開催による地域の皆様方の協力や「自然の一部としての川」という意識の醸成によるものも大きいと考えています。

このような状況を維持していくためには、老朽化による課題が懸念される上下水道をはじめとする様々なインフラに対する投資に関する課題解決の道筋と合意形成は喫緊の課題になりつつあります。

また、豊かな水産資源の源である三河湾との関係を考えていくことも重要です。全国での屈指の閉鎖性海域でもある特徴的な性質に加え、中央構造線の東端ゆえの特徴的な土壌がこの三河湾を支えていることを踏まえながら、「豊富な栄養塩の供給源としての川」「海洋中のマイクロプラスチックの流入減としての川」という「キレイ過ぎず、キレイな川」というような複数の相矛盾する課題についても継続的に見守っていく必要があります。

2005-2. 夏期の水温上昇(無植栽、コンクリート護岸による輻射熱、溜め池での長時間にわたる水の滞留などによる)とそれによる溶存酸素の減少が危惧される

2005-3. コンクリート護岸により、多くの水生生物の生息可能性が阻害されている

現在、私たちが実施しています継続的な水質モニタリング調査によれば、ここ数年の水温上昇については、大きな危機感を感じざるを得ません。2024年のみで考えても、夏期の降水量の不足に加え、コンクリート護岸の河川の場合においては、コンクリートそのものが持つ熱量と河川の流量によって、移動する熱エネルギー収支のバランスも考えれば、生態系の保全と言う面においてもマイナスの要因のほうが多いのが現状です。

このような、三面張りと言われる護岸を多自然型護岸に移行していくことで、護岸用の石と石の間に影ができ水温などの調整機能につながったり、多くの水生生物の隠れ場所のみならず、ホタルや両生類などの水中と陸を行き来する生物などにとつての移行帯(エコトーン)となり、水温の調整機能のみならず、生物多様性にも大きく貢献するためできる事の一つとして考えていく必要があります。

また、多自然型護岸は、治水の面からも、河畔林の樹木が倒木となり河川を流れ降りることで、被害を大きくする可能性への対応策にもつながってきます。

これには、水循環の考え方の啓蒙や理念条例づくりも含め、今後は、もう少し総合的な視点で提案していきたいと思います。

2005-4. 落差工により、魚類の上下流の移動が妨げられている

落差工の問題につきましては、2008年に河川管理者である愛知県から、「朝倉川魚道設置計画」という形で、具体的な提案を受け、500mm以上の落差工17か所、それに準ずる落差工3か所の計20か所の整備計画により、整備されました。整備の方針としては、川幅全体を対象に魚道化する「全断面魚道」を中心に段階的に整備を進め、現在では、計画はほぼ終了しました。平成27年に、上流部で鮎の遡上が見られたことは、水質環境だけでなく、落差工の整備によるものが大きいと考えています。

2005-5. 夜間照明により、ホタルを始めとする生物のバイオリズムが狂わされている

多くの昆虫の場合、その生育において本来の自然界のサイクルというものが非常に重要であるということは、言うまでもありません。

様々な活動を行っていく中で、自治体や学校行事も含めて、ホタル観察会を開催するなど地域でのホタルへの関心が高まることで、夜間照明に関しても理解と協力が得られつつあると考えています。

とはいえ、ホタルの成虫が飛翔し、繁殖を行う時期を中心に夜間照明のような人工的な刺激を緩和することに対して多くの方にご理解をいただくことは引き続き必要だと思います。

2015-1 . 絶滅危惧種「川ガキ」の再生に向けての制度づくりへの提言

2015-1-1. 子どもたちの体験を支えるための包容力ある社会の実現

2015-1-2. 滝ノ谷池ビオトープを中心に子どもたちの体験活動の実施

2015-1-3. 子どもたちの豊かな体験を育む環境を支えるための「子どもの未来を支えるための理念条例」の制定

朝倉川流域ビジョン2015のサブタイトルでもあります「こどもたちの体験を持続可能なチカラに…」の通り、「体験」を大切にしていまいりました。「ゲームばかり…」「外遊びをしない…」という言葉は、相変わらず耳にしますが、数多くの「体験」の場面で次世代を担う子どもたちが接する機会をつくらせていただいています。

その一方で、YouTubeなどのビジネススペースによる情報の氾濫によって、何が「できる…」とか、「できない…」ということに完結してしまうことも同時に増えてきています。

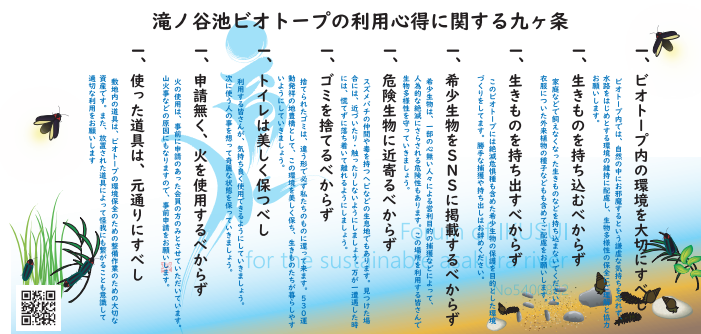
私たちの活動の一つ一つには、生態系の保全や生物多様性の保全という視点につながるそれぞれの理由があります。そして、何よりも「育水」の理念に沿った活動を大切にしています。そのためには、子どもたちの「何故…？」に丁寧に応えることができる、周りの大人が必要です。

その「何故」の答えの一つが「滝ノ谷池ビオトープの利用心得に関する九ヶ条」になります。滝ノ谷池のビオトープについても、生物多様性の保全のための実践フィールドであり、いくなれば壮大な研究施設なのです。

そして、そこに集う子どもたちは、私どもの共同研究者なのです。単に火起こしができる場所であれば、民間のキャンプ場と同じになってしまいます。

子どもたちの行動は大人たちの鑑です。お膳立てしすぎることなく、子どもたちの「何故…？」に真摯に向き合う大人たちがいてこそ包容力のある社会の一助になると考えています。

また、「子育てしやすいまちづくり」というキャッチフレーズも耳にする機会は増えたものの、責任回避型のルールはますます氾濫し、子どもたちがのびのびと遊ぶことができるための考え方の醸成とともに、その理念を条例として形にしていけることを引き続き提案していくことが大切だと考えています。



▲この看板を滝ノ谷池ビオトープ管理棟に設置しています。



2015-2. 地域の人たちが自分たちの「水」を支えるための「水循環条例（理念条例）」の制定**2015-2-1. 世界に数少ない「水道水を飲める国」としての誇りと保全に対する気持ちの醸成****2015-2-2. 文明の進化などによって、早められてしまった水循環を適正な速度にするための具体的な事例の推進（個人、事業者、行政のそれぞれのセクターに対して）****2015-2-3. 利便性によって損なわれた水環境を再生するための代償制度など**

「水の枯渇と多雨時の鉄砲水の危険性がある（2005-1.）」で、提言させていただいた課題は、ますます顕在化するとともに、自然と言うエコシステムの範囲を超えて、かつての社会インフラの老朽化の問題などが複雑に入り組んでいます。

そのためには、現状のエコシステムの負荷の状態を見直し、一人ひとりが出来る事を実践していく必要があります。

愛知県では、生態系の保全に対して代償ミティゲーションの制度を導入することで、開発や、土地利用によって損なわれた自然を評価検討し、同等の生態系の創生と保全を促進しています。このような考え方を、グリーンインフラという概念を通じての代償の仕組みの構築は、現状の水を取り巻く様々な課題を考えれば必要不可欠と言わざるを得ません。

グリーンインフラ活動に関する、様々な活動事例を共有しながら、情報発信をしていくことで、大きなムーブメントにしていく必要があります。



▲井原第二公園まちなかビオトープ
6月になるとゲンジボタルが飛び交います。

朝倉川流域ビジョン2025**持続可能に向けてのこれからの10年**

朝倉川育水フォーラムでは、「育水」という活動理念のもと、定期的に提言をさせていただいています。2005年の提言では、治水を中心としたインフラ整備に関わる内容が多かったことに対して、2015年の提言では社会を支える人に積極的に関わることで「育水」の理念を広げていくという方向性にシフトさせていただいています。

その象徴的なメッセージが絶滅危惧種「川ガキ」の再生です。私たちが大切にしています生態系の保全やそれを支える環境の保全は、一朝一夕に実現するものではなく、長いタイムスケールでの取組によって少しずつ進んでいくものになります。

だからこそ、社会の変容に合わせた事業の継続性は、次世代につながる大きなチカラになるとともに、事業継続の「何故…？」を問い続けることがより重要になってくるのです。

更に、水循環に関わる社会的な課題については、より複雑化するとともに災害に直接影響しているという事例の増加も含めて喫緊の課題という認識になりつつあります。

その一方で、地球温暖化などグローバルな問題の顕在化によって、「自分たちの出来ること…」に対する無力感を感じてしまう方が増えてきたり、目的の共有は出来ているものの、そのプロセスやエビデンスの違い、情報源の単一化などのバイアスによって偏った考え方を過度に主張し、対立軸を強化してしまうような事例も環境問題については少なくないことも事実です。

だからこそ、地球温暖化や気候変動のエビデンスにこだわり過ぎず、ヒートアイランド抑制という、目の前の分かりやすい視点で出来ることを提案していく必要があります。

その具体的なアプローチのひとつが、グリーンインフラという考え方です。グリーンインフラは、「社会資本整備や土地利用等のハード・ソフト両面において、自然環境が有する多様な機能（生物の生息・生育の場の提供、良好な景観形成、気温上昇の抑制等）を活用し、持続可能で魅力ある国土づくりや地域づくりを進めるグリーンインフラに関する取組」と説明されており、単に「自然環境を守る」という概念とはあえて一線を画し、「自然の機能を利用する」と考えることで、社会活動と環境保全の調和を目指す仕組みです。

それには、目の前の利便性を最優先するだけではなく、一人ひとりが「面倒な事…」 「次代のために…」 に対しても少しずつ持ち出しをすることが普通になっていく事を目指すということと同時に意味と考えています。

流域ビジョン2025での提言

① 絶滅危惧種「川ガキ」の再生に向けての制度づくりへの提言と体験の場面づくりのためのパートナーづくりの推進

□ 子どもたちの体験を支えるための包容力ある社会の実現に向けて

- 地域と世代を繋ぐための「地域市民参加型環境啓発事業」の継続
…………… 朝倉川530大会・朝倉川植樹メンテナンス大会など
- 環境の変化を体現するための環境のモニタリングの継続実施
…………… 河川調査(水質・生態系etc)、「朝倉川探検隊」
- 壮大な研究施設としての滝ノ谷池ビオトープを利用した体験活動の実施及び、次代につながる知的好奇心の醸成

□ 子どもたちの豊かな体験を育む環境を支えるための理念条例」の制定

② 新しい水循環を支えるためのグリーンインフラ運動の推進

- 早められてしまった水循環を適正な速度にするための具体的な事例の推進
…………… 個人、事業者、行政のそれぞれのセクターに対して

③ 地域の人たちが自分たちの「水」を支えるための「水循環条例(理念条例)」の制定

- 世界に数少ない「水道水を飲める国」としての誇りと保全に対する気持ちの醸成
- 利便性によって損なわれた水循環を再生するための代償制度の提案

流域ビジョン2005での提言

- ① 水の枯渇と多雨時の鉄砲水の危険性がある
- ② 生活雑排水、尿系排水、農業などの流入により水質の悪化が懸念される
- ③ 夏期の水温上昇(無植栽、コンクリート護岸による輻射熱、溜め池での長時間にわたる水の滞留などによる)とそれによる溶存酸素の減少が危惧される
- ④ コンクリート護岸により、多くの水生生物の生息可能性が阻害されている
- ⑤ 落差工により、魚類の上下流の移動が妨げられている
- ⑥ 夜間照明により、ホタルを始めとする生物のバイオリズムが狂わされている

流域ビジョン2015での提言

- ① 朝倉川530大会・朝倉川植樹メンテナンス大会など地域市民参加型環境啓発事業の継続(4-2、4-3)
- ② 河川調査を中心とした、環境(水質・生態系etc)のモニタリングの継続実施(4-4)
- ③ 絶滅危惧種「川ガキ」の再生に向けての制度づくりへの提言(4-1、4-4)
 - 子どもたちの体験を支えるための包容力ある社会の実現
 - 滝ノ谷池ビオトープを中心に子どもたちの体験活動の実施
 - 子どもたちの豊かな体験を育む環境を支えるための…………… 「子どもの未来を支えるための理念条例」の制定
- ④ 地域の人たちが自分たちの「水」を支えるための「水循環条例(理念条例)」の制定
 - 世界に数少ない「水道水を飲める国」としての誇りと保全に対する気持ちの醸成
 - 文明の進化などによって、早められてしまった水循環を適正な速度にするための具体的な事例の推進(個人、事業者、行政のそれぞれのセクターに対して)
 - 利便性によって損なわれた水環境を再生するための代償制度など

朝倉川育水フォーラムの活動

朝倉川育水フォーラムの活動は、源流～上流部でのビオトープや里山の整備作業、上流から下流域での川の調査、全流域を対象とする美化や兩岸のメンテナンスなど多岐にわたります。ホタルが飛び交う人里づくりを目指すために、どの事業もとても大切なことです。私たちの活動には、「育水」という理念に共感していただき、協働していただけるパートナーの存在が欠かせません。それとともに、この朝倉川育水フォーラムの活動が持続可能な活動となるための次世代を担う子どもたちが楽しく活動し、学び、仲間になることもとても重要なことだと考えています。私たちの活動を紹介します。

1. 生物多様性のためのビオトープづくり

2. 水源林保全のための里山づくり事業

3. 朝倉川美化事業(朝倉川530大会)

【寄稿】 Little by Little 多米530運動部 和田蒼平/友永英雄

4. 水辺の緑の回廊事業(植樹メンテナンス大会)

【寄稿】 ワルツ株式会社 片桐鉄也

5. 朝倉川調査研究事業

6. ホタル飼育ネットワーク事業

7. 青少年育水事業

【寄稿】 学校法人桜丘学園 満田康一

8. 絶滅危惧種川ガキ再生事業 ガサガサ探検隊

9. 連携事業

【寄稿】 株式会社紅久 三浦裕司

10. 協力団体・関連団体・所属団体

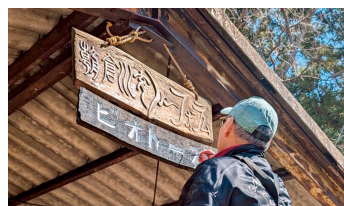
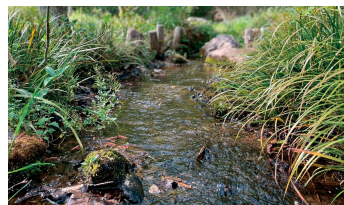
11. 組織基盤の強化

12. 広報・PR啓発事業

13. 朝倉川に願いを込めて

1. 生物多様性のためのビオトープづくり

平成11年9月より、源流部の多米滝ノ谷に約2,700㎡のビオトープづくりを始め、管理運営をしています。ビオトープは、源流から朝倉川全体への多様な生物の供給源と位置付け、季節ごと必要となる整備作業を毎月2回以上行っています。継続して整備することにより、多様な生物が共存し、希少生物の保護にもつながっています。毎回新たな発見があり、環境や生き物の神秘を感じます。また、子どもたちの環境教育のフィールドとしての位置付けも担っている重要な拠点です。敷地に隣接するエリアでは、田んぼや畑などもあり、旬の作物づくりも行っています。



2. 森に親しむための里山づくり事業

人が森に親しむきっかけをつくるため、朝倉川の源流付近、ピオトープ上流の石巻山多米県立自然公園の中の国有林を「里山」として整備しています。人工林と雑木のバランス、日の光の入り方や、植生を考えながらメンテナンスします。希少な植物や生物が生息範囲を広げたり、新たに発生したり、自然の力強さを感じます。また、近年は大雨による倒木なども多く発生し、里山の遊歩道の危険を取り除くことも私たちの重要なミッションです。多米の里山づくりを楽しむ会、(一社)豊橋青年会議所、愛知森林管理事務所などと連携し親しみやすい里山づくりに取り組んでいます。



3. 朝倉川美化事業(朝倉川530大会)

平成9年から身近な環境改善運動へのきっかけづくりとして、「朝倉川530大会」を行っています。行政、自治会、企業、団体、地域住民を中心とした市民の皆様とパートナーシップを取り、朝倉川の源流付近から河口までの全域を約2,000名の皆様とともに河川環境美化運動となっています。現状では、源流付近の山間部の林、全域の橋付近ではゴミの散乱が多くみられます。身近な環境改善運動へのきっかけづくりのため、パートナーの皆様と実行委員会を組織して地域ぐるみで活動を展開しています。また、530大会に併催して、環境啓蒙活動の一環として「絵はがき・朝倉川へのメッセージコンクール」を行っています。





Little by Little 多米530運動部
和田 蒼平 / 友永 英雄

朝倉川育水フォーラムの皆さま、創立30周年おめでとうございます。長年にわたり、朝倉川をはじめとした地域の環境や人々を支え続けてこられたことに、心から感謝と敬意を申し上げます。

私たちLittle by Littleは、小学4年生の授業で環境について学び、「自分たちにできることは何か」を考え、公園でのゴミ拾いから活動を始めました。朝倉川育水フォーラムの皆さまをはじめ、多くの方々に支えていただきながら、「小さなことを、こつこつと」をモットーに掲げ、活動

の幅を広げながら今も継続して活動を行っています。

毎年朝倉川で行われている朝倉川530大会は、地域の企業や団体など多くの人が一斉に参加する素晴らしい活動で、地域全体が美しくなっていく様子を実感でき、私たちにとっても大きな励みとなっています。

また、多米校区の魅力のひとつである朝倉川のホタルの保全に向けて、源流付近で行われている「滝ノ谷池ビオトープ」の活動からは、環境保全の継続の大切さを学び、僕たちも自分たちにできることを続けていこうと、改めて感じるきっかけとなりました。

こうした経験を通じて、地域は一人ひとりの小さな行動の積み重ねによって支えられていること、そして人と自然のつながりの大切さを学びました。これからも、朝倉川育水フォーラムの皆さまのように地域を思い、感謝の気持ちを忘れずに、少しずつでも地域に貢献できるよう活動を続けていきたいと思っています。



●Little by Little 多米530運動部 <https://littlebylittle530.com>

多米校区を拠点に“小さなことをこつこつと”をモットーに地域貢献を続ける小中学生を中心としたボランティア団体「Little by Little 多米530運動部」。月1回の530運動や、みんなの食堂、みんなの図書館、おちばパークなど、多彩な取り組みを通じて、地域をより良くしたいと考えています。



WEBサイト

4.水辺の緑の回廊事業(植樹メンテナンス大会)

愛知県をはじめとする多くのパートナーシップにより、水辺の緑の回廊事業が始まりました。1998年から5年間で、赤岩電停付近の多米橋から上流に向かって始まり、多米小学校脇の寺門橋までの約2.1kmの両岸に約44,000本の広葉樹を中心とした約60種の木々を植樹しました。ホタルをはじめとする様々な生物が生息しやすい環境づくり、地域の方々の防犯上の安全配慮、暮らしやすい街づくりなどの側面から必要な事業となっており、現在では、植樹メンテナンス大会として、年に1回、樹木の枝打ちや除草、清掃活動を行う環境整備事業を行っています。





フルツ株式会社

代表取締役社長 片桐 鉄也

弊社と朝倉川育水フォーラム様との関わりは、設立された1995年の同じ時期に前代表が豊橋商工会議所の環境委員会に属しておりました時期に遡ります。当時環境委員会では「ゼロエミッション」を提唱し、弊社社内においても生じた廃棄物を資源として有効活用する考え方を浸透させていった時代です。

1997年に開催された育水フォーラム主催の第1回530大会には、前代表の呼びかけで社内数名が参加しました。また、時を同じ

く会社でもISO14001環境マネジメントシステムを認証取得する活動が始まりました。翌年には植樹メンテナンス大会も開催され、会社としても環境活動を行事として企画し、多くの社員が育水フォーラムに参加しながら独自の環境活動も実施し、環境に対する意識が会社や家庭でも広がっていきました。

当社では2000年にISO14001環境マネジメントシステムを取得して以来、会社行事として全員参加の活動を「ISO推進日」として年2回開催しています。両日ともに朝倉川育水フォーラム様主催の530大会・植樹メンテに参加し、朝倉川流域の皆様が自然と共生できる環境整備に取り組んでおります。ただゴミが減るだけでなく、当初の目的でもあった蛍の生育も確認できた、多様な生物が生息しやすい環境が徐々に整いつつある実感しております。

弊社では、ISO14001の他、ISO9001も取得しております。環境と品質の観点より、レギュラーコーヒーの抽出カスであるコーヒーグラウンズの再資源化、CO2排出量低減の取り組みを積極的に行っております。朝倉川育水フォーラム様の取り組みを通じて、社員一人ひとりの活動が地域や環境に与える影響を考える良い機会となっております。今後も朝倉川流域のみならず、事業活動領域における自然環境の整備、地域貢献に従事して参ります。

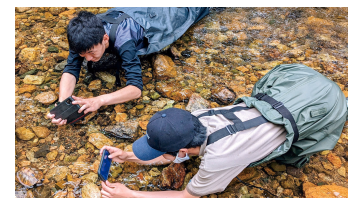


●フルツ株式会社

1952年設立。フルツのコーヒーの名のもと、嗜好食品が満足に入手できなかった頃から「コーヒーこそ生活と人生を豊かに演出する最良の嗜好品」と捉え、最高のコーヒー豆を世界の産出国から輸入し、自社で焙煎してお届けしてきました。

5.朝倉川調査研究事業

2002年から、朝倉川の水質および、指標生物生息状況のモニタリングを季節毎の年4回、定点調査を行っています。①西郷橋上流部、②豊橋競輪場北川親水ステージ付近、③公園橋下流部の内山川との合流部、④滝ノ谷池ビオトープ。気温、水温(℃)、水素イオン濃度(PH)、化学的酸素要求量(COD)、亜硝酸イオン(NO₂-)、亜硝酸体窒素(NO₂-N)、硝酸イオン(NO₃-)、アンモニウムイオン(NH₄+)、アンモニウム態窒素(NH₄-N)、流速、河床の状態、指標生物の採取(魚類、水生昆虫、甲殻類、貝類etc)の項目について簡易水質分析製品バックテストで調査し、通称ガサガサと言われる網による採取という方法で指標生物調査を行います。



6. ホタル飼育ネットワーク事業

ホタル再生目標区間として、上蟬川橋から寺門橋までの約2kmでゲンジボタルの再生を図ってきました。初期段階において、採卵～幼虫やカワナナの飼育と放流を実施しましたが、放流を実施しなくなった現在でも安定的に自然のサイクルの中で発生から繁殖までを確認できるようになり、一定の成果を収めることができました。この一連のノウハウを朝倉川流域外でも広めるべく、豊橋市嵩山地域の小学校において、地元河川での採卵～飼育、放流を環境教育の一環として継続実施をしていただいています。今後も依頼があれば、積極的にゲンジボタルの再生事業へ関わり、ネットワークの環を広げていきたいと思います。



7. 青少年育水事業

朝倉川育水フォーラムの活動を繋げていくことは、「育水」の理念を繋げていくことと同意です。水を育てるために、人を育てる。青少年育水事業は、流域の小中学校、高校に通う子どもたちにとって身近な川である朝倉川のことを知ってもらい、興味をもってもらう事業です。毎年、学校での出前事業や朝倉川での水質調査、魚採り、ビオトープでの生物観察、里山散策など、目的に合わせた課外授業を行っています。このような体験を次世代の持続可能なチカラにつなげていくことを目指しています。また、各種事業にも子どもたちの参加を募集し、実体験が伴う活動に力を入れています。子どもたちの活動を形にするため、ボランティア証明書の発行も行っています。





学校法人桜丘学園

理事長 満田 康一

桜丘中学校では、開校当初より「21世紀の特色ある授業づくり」を目指し、第2・第4土曜日に「土曜科(総合的な学習の時間)」を設定しました。自然環境への関心を高めるとともに、自然との共生(保全と保護)の重要性を学ぶことを教育の柱の一つとし、取り組みを開始しました。初期の学習テーマは「朝倉川にホテルを呼び戻そう」としました。朝倉川を学びの場として、清掃活動、水質調査、水生生物の観察などを開始し、中でも清掃活動は2025

年4月で第32回を数えるまでに至りました。

1995年に朝倉川育水フォーラムが設立された初年度より、本校は団体として加盟しました。それ以来、総合的な学習の時間におけるカリキュラムの作成・提案、講師の派遣など、全面的なご支援をいただきながら、今日に至っております。また、1997年には第1回朝倉川育水フォーラム主催の「530(ごみゼロ)大会」が開催され、本校も以降、継続的に参加しております。

昨年度は、1年生の「総合的な探究の時間」において、ビオトープ探検(森林のはたらき)、野草の学習(野草の天ぷら、食べられる野草と食べられない野草の識別)、朝倉川での生き物観察(生物多様性の学習)、講演会など、かけがえのない自然体験を数多く提供していただきました。

多感な時期にある中学生にとって、自然に「触れ・感じ・理解する」機会には極めて貴重な学びとなります。こうした素晴らしい教育の機会を、長年にわたりご提供いただいていることに、心より感謝申し上げます。

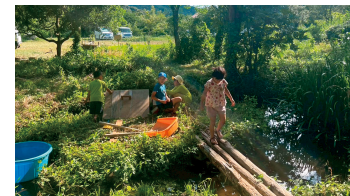


●学校法人 桜丘学園 桜丘中学校

桜丘中学校は、戦後の学制改革に伴い、昭和22年に中八町の旧兵舎を仮校舎として開校いたしました。以来、二度にわたる休校と再開を経て、平成5年(1993年)に三度目の新たな歩みを始め、地域の皆様からの温かいご支援とご協力のもと、現在、創立33年目を迎えております。第三期の桜丘中学校は、「かしこさ・やさしさ・つよさ」を教育目標に掲げ、生徒一人ひとりの個性を尊重し、その可能性に気づかせる環境づくりに取り組む一方、国際的な視野を養い、自ら課題を発見し、主体的に解決へ導く力を育む教育を実践しております。

8. 絶滅危惧種川ガキ再生事業

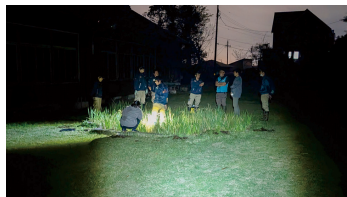
私たちの活動は、持続可能な環境の維持を目指しています。理念に掲げる「育水」には、水を育むこと、そして次世代へ繋げていくための人を育てるという意味も込められています。それらの一環として、今では絶滅危惧種となっている「川ガキ(川を中心とした自然に積極的に親しむ子ども)」の再生事業を行っています。夏季長期休暇に合わせ、「朝倉川探検隊」として、水質モニタリングや、水生生物の採り方、川で遊ぶときの気を付けることなどを伝え、子どもたちの育成事業を継続的に行っています。私たちの活動が、楽しく、たくさんの発見や実体験が積み重なることによって、次世代の「育水」継承者が増えていくことを目指しています。



9.連携事業

環境を切り口とした「まちづくり」において、とても大切なのが多岐に渡る「ひと」や集団と繋がりを持つことだと思います。物事を前に進める上で、自治会や流域民、企業、行政、様々な関係諸団体と連携を取ることによって大きな成果とすることができ、そういった多角的に合意形成された取り組みが持続可能な活動や運動になっていきます。また、相談相手として専門家や研究機関との連携も大切にしています。流域内の様々な動植物を詳細に知り、知れるからこそ、その保全を望ましい活動として推進することができます。

朝倉川の源流部にあたる弓張山地の該当山地を、多米自然歩道を楽しむ会、多米の里山づくりを楽しむ会と連携して、豊橋自然歩道の安全パトロールを実施するとともに、源流部の状態の確認を行っています。また、より良い自然と都市との共生を目指す中で、希少な動植物の保全をより良い形にしていくために、豊橋総合動植物公園、豊橋市自然史博物館、愛知教育大学、名古屋大学、人間環境大学と都度合同調査を実施しています。



今から30年ほど前、私は朝倉川育水フォーラムの創業者であり初代会長の故青木徳生さんと個人的繋がりがあったこともあり、活動に関わるようになりました。青木会長は当時、豊橋商工会議所の副会頭を務め、ご多忙であったが、趣味が同じということで30代半ばの若輩であった私をかわいがっていただき、福井県、石川県、静岡県の溪流に頻繁に出かけたものです。青木会長は、道中の車の中でフォーラム設立の意義をよく語ってみえました。

日く、経済団体である豊橋商工会議所が自然保護団体を創立することは、先進的、先導的である。今は会員獲得に苦労しているが、いずれは時代が変わり、企業に環境負荷低減を求められる時代が来る。その時にはフォーラムの存在は大きなものとなるであろう。

日く、朝倉川は市内の中心を流れる里川である。市民運動による自然環境回復のためのショールームとして最適である。

そうしてできた当時のプロジェクトは以下のようなものである。「朝倉川ゴミゼロ大会」「朝倉川植樹メンテナンス大会」「多米滝ノ谷池ビオトープ」「井原第二公園まちなかビオトープ」。



そのような組織づくり、事業運営の経験が私の企業経営にも大いに役立っていることに最近になって気づきました。朝倉川育水フォーラムと、このようなご縁を持たせていただいていることに感謝するとともに、30周年を迎えられたことを心より喜び申し上げます。

●三浦 裕 司

1961年生まれ。豊橋市の東田校区に生まれ育ち、幼少期より朝倉川およびその周辺の里山で、在来淡水魚類、両生類、昆虫などに深く触れ合う。大学時代には溪流釣りや熱中し、ザイル、ハーゲンなどの登攀器具を背負い、巨大イワナを求め日本全国の深山幽谷を旅した。現在は、株式会社紅久の代表取締役社長として、金属リサイクル業を営む。2024年には、愛知県より、朝倉川育水フォーラムへの活動を評価され「あいち生物多様性企業認証」を受賞。



株式会社紅久
代表取締役社長 三浦 裕 司

10.協力団体・関連団体・所属団体

私どもの組織が環境保全団体である以上、河川をはじめとする自然環境や生態系に関わるあらゆる環境を対象として活動を行っています。そして、それぞれの環境に関わる所有権を家事目とする様々な権利は、行政のみならず、地域の様々な人にも関わってくる問題であります。

「育水」という理念は当然のことながら私どもがこうしたいからと言って 一方的にしていというものではありません。そこには丁寧な合意形成が不可欠です。結果がなかなか見えにくい 環境問題であるからこそ、パートナーシップ という考え方を大切にしながら、行政機関のみならず、関係する自治会などの地域コミュニティ、その他様々な 団体との理解と協力を持って進めていっています。

法人会員 ※令和7年7月現在

サーエナジー(株)/東海交通(株)
 (株)オノコム/豊橋信用金庫/豊橋鉄道(株)/ヤマサちくわ(株)/ユタカコーポレーション(株)
 蒲郡信用金庫/豊橋支店/杉本屋製菓(株)/東愛知日産自動車(株)/(株)マッターホーン/三菱ケミカル(株)愛知事業所/(株)三菱UFJ銀行/ワルツ(株)
 トビー工業(株)豊橋製造所/(株)アイセロ/イノチオホールディングス(株)/(株)総合開発機構/
 (株)中部松井商事(株)/(株)エアーテック朝日/(株)小林佃煮/(株)樹研工業/中部電力豊橋支社/
 トヨネン(株)/三菱ケミカルエンジニアリング(株)/(株)メガネ流通センター
 愛知ラインリック(株)/青山建設(株)/縣護謄工業(株)/旭精機(株)/(有)アミカル/(株)アユミックス(株)荒木石油店/(株)大木家/大谷左官/(株)オーラッド/岡本漁網(株)/カゴメ食品(株)/
 加藤金物(株)蒲郡信用金庫東田支店/(有)クロヤ商会/(株)経真/(有)児玉商店/(有)コモダガス/
 栄土地測量設計(株)/佐々木繊維(株)/(株)サンカンパニー/(株)三光製作所/(株)柴田建設/商
 工中金豊橋支店/昭和製菓(株)/(株)杉八/成和环境(株)/総合埠頭(株)/(株)大栄製作所/(株)大
 三コーポレーション/(有)大和/大和ハウス工業(株)/タサキ溶材商事(株)/東海興業(株)/東海食
 膳協業組合/東豊製菓(株)/(株)トーエネック豊橋営業所/トビー海運(株)/(株)豊田組/トヨタネ
 (株)/豊橋商工信用組合/豊橋飼料(株)/中島印刷所/(株)羽田住宅サービス/(株)花田工務店/東
 三河ヤクルト販売(株)/彦坂会計事務所/(株)ビジネスリンク/(株)ヒミカ/(株)紅久/(株)豊川堂/
 /(株)ホワイト商会/本多電子(株)/(株)三河シー・エス・エヌ/宮川工機(株)/三吉自工(株)/ムラ
 タ保険ドッグサービス/守田光学工業(株)/(株)ヤマウチ建材/(有)山田庭園設計/(株)ヤマナカ
 赤岩店/(有)吉田商会

※敬称略、五十音順

団体会員 ※令和7年7月現在

社会福祉法人岩崎学園/大橋通2丁目自治会/北岩田一区自治会/学校法人桜丘学園/学校法人蜷川学園/豊橋市立多米小学校/豊橋商工会議所女性会/一般社団法人豊橋青年会議所/豊橋創造大学/豊橋中央高校/豊橋農業協同組合/公益財団法人豊橋文化振興財団/東三河懇話会/郵便局局長会

※敬称略、五十音順

530大会、植樹メンテナンス大会など企業・団体パートナー

(株)アイセロ/愛知県東三河建設事務所維持管理課/井村屋フーズ(株)/(株)荏原製作所/(株)大木家/オノコムグループ/ガールスカウト愛知35団/日下建設(株)/(株)経真/国交省豊橋河川事務所/530運動環境協議会/サーグループ/桜丘高校/桜丘中学校/谷山建設(株)/多米小学校/中部森林管理局愛知森林管理事務所/中部電力パワーグリッド(株)豊橋営業所/千代田インテグレ(株)/東海興業(株)/東海交通(株)/豊橋青色申告会/豊橋競輪場/豊橋市役所環境部ゼロカーボンシティ推進課/豊橋市役所建設部河川課/豊橋市役所職員労働組合/豊橋市上下水道局/豊橋商工会議所女性会/豊橋商工信用組合/豊橋市立青陵中学校/豊橋市立多米小学校/豊橋信用金庫/(一社)豊橋青年会議所/豊橋中央高校/豊橋鉄道(株)/豊橋ローターアクトクラブ/豊橋ロータリークラブ/長谷川建設/NPO法人東三河水道サポーターズ/フジプレコン(株)/(株)紅久/三菱ケミカル(株)豊橋事業所/ヤマサちくわ(株)/郵便局局長会/リコージャパン/リトルバイリトル多米530運動部/ワルツ(株)

旭校区自治会/東田校区自治会/東田西郷町自治会/東田東部・西部自治会/東田中郷町自治会/岩田校区自治会/牛川校区自治会/牛川南町自治会/北岩田一区自治会/北岩田三区自治体サポートチーム/北岩田三区シニアクラブ/鷹丘校区自治会/多米校区自治会/多米中町二丁目自治会/多米東町一丁目自治会/多米東町二丁目自治会/多米東町三丁目自治会/東郷町一区自治会/仁連木町自治会/八町校区自治会/東小鷹野一・二丁目自治会/若宮町自治会

※敬称略、五十音順

連携・関係諸団体

愛知教育大学/愛知県河川整備計画流域委員会/愛知県環境局水大気環境課/多米自然歩道を楽しむ会/多木の里山づくりを楽しむ会/豊橋市自然史博物館/豊橋市生物多様性ネットワークづくり懇話会/豊橋市まちづくり市民会議/豊橋総合動植物公園/豊橋プレーパーク/名古屋大学/人間環境大学/東三河生態系ネットワーク協議会/穂の国森づくりの会/みずとみどりの研究会

※敬称略、五十音順

11.基盤の強化

多くの方が当会の活動に関わっていただくことは、組織の持続可能性または、組織を支える経済的基盤としても大変重要です。当会は、個人会員と法人もしくは団体の2つの会員で構成されています。これは、育水の理念を共有する個人の気持ちを大切にするとともに、様々な企業や団体が積極的に環境保全に取り組むことが、持続可能な社会につながると考えているからです。当会は、その入り口となることを目指しています。豊橋商工会議所100周年記念誌「界を超越えて」の理念にもあるように、企業の持続可能性と社会の持続可能性には大きな関わりがあるからだと考えているからです。

かつて、1,200円であった年会費(個人)を1,000円に減額しました。これは会費そのもので運営していくのではなく、育水の理念を理解していただくため、より多くの仲間の環を広げたいという考えに基づいています。

12.広報・PR啓発事業

私たちの活動は、常時法人会員様、個人会員様を募集しています。活動内容は、毎年1回発行している広報誌「朝倉川通信」をはじめ、日常的な活動報告、活動スケジュール、事業の募集などは各種SNSで配信しています。また、ホームページには、朝倉川育水フォーラムの設立趣意書や理念、これまでの歴史などなど、様々な情報を掲載しています。ぜひアクセスしてみてください。



公式WEBサイト



Amebaブログ



Facebook



Instagram



X



LINE公式アカウント

朝倉川育水フォーラム
入会申し込みフォーム



お電話でも承ります。
豊橋商工会議所内事務局

080-6923-5257

会員に直接お声がけ
いただいても対応いたします。

皆様と活動できることを心から願っております。

13.朝倉川に願いを込めて

当会会員の太羽利高氏が生成AIを活用して制作した曲が「朝倉川に願いを込めて」です。生成AIに朝倉川育水フォーラムの理念と概要を読み込ませ、言葉を修正して詩を作成。出来上がった詩を生成AIで作曲しました。下のQRコードよりホームページに掲載した「朝倉川に願いを込めて」をご試聴いただけます。
「朝倉川に願いを込めて」は、当会の公式テーマソングとして展開して参ります。

朝倉川に願いを込めて

作詞:生成AI・太羽利高 作曲:生成AI
制作:太羽利高

流れる水に 耳を澄ませば
遠い昔の声が 聞こえる
山に降った 小さなしずく
やがて川へと 命を運ぶ

水を育て 人を育て
小さな力 集めよう
朝倉川に 夢を映して
笑顔つなぐ この街で

水を育て 人を育て
未来へ繋ぐ 優しい手
朝倉川に 願いを込めて
今日も 一歩 踏み出そう

山も 川も 風も 空も
語りかける 命のうた
ともに生きる その喜び
未来を灯す 希望灯す

土に根差す 草木のように
ひそやかに でも続けてゆこう
知恵を合わせ 手をたずさえ
育てる水は 明日を潤す

水を育て 人を育て
未来へ繋ぐ 優しい手
朝倉川に 願いを込めて
今日も 一歩 踏み出そう

「朝倉川に願いを込めて」は
朝倉川育水フォーラムのHPからご視聴いただけます。

https://www.asakuragawa.net/what_forum.html



終わりに・謝辞

自然と向き合う中で、時に無力と感ずることがあります。その行いが最善であるのかを逡巡したり、その意義を問うこともあります。何度も失敗を経験し、立ち止まってしまうこともあることだっております。順風満帆なことばかりではありませんでしたが、それでも歩みを止めずに進んできました。気がつけば植えた樹は大きくなり、川からゴミは減少し、そのせせらぎで遊ぶ子どもたちも増え、毎年ゲンジボタルの美しい乱舞を観ることができるようになったということは、やってきたことに意義はあったのだと思います。まだまだこの運動や活動は道半ばではありますが、10年後、20年後…振り返った時に、今と同じように関わる人たちに素敵な笑顔があり、懸命により良い自然と都市との共生を模索する姿があることを切に願います。

最後になりますが、本法人の運動や活動を牽引していただいた歴代理事長である青木徳生氏(故人)、寺本和子氏、高橋豊彦氏、本当に多くの30年間の活動に関わっていただいた全ての方々。また、発刊にあたりご協力いただいた、三菱UFJ銀行様、株式会社紅久様、総合動植物公園長 伊藤紀治氏、動植物園長 高見一利氏、豊橋市自然史博物館長 吉川博章氏をはじめとする豊橋総合動植物公園並びに豊橋市自然史博物館の皆様、愛知教育大学教育学部理科教育講座 准教授 島田知彦氏。お忙しい中執筆にご参加いただいた加藤博康氏(植物)、時習館高等学校 元生物部部長 柴田哲兵氏(魚類)、桜丘高等学校 元生物部副部長 伊藤憲伸氏(爬虫類)、豊丘高等学校 伊奈稜一郎氏(爬虫類/カメ)。快く寄稿文をお寄せいただいた多米校区自治会 会長 川本恭久氏、多米の里山づくりを楽しむ会 会長 大木伸浩

氏、学校法人桜丘学園 理事長 満田康一氏、株式会社サンルイ・インターナショナル 代表 森田敦子氏、株式会社 紅久 代表取締役社長 三浦裕司氏、ワルツ株式会社 代表取締役社長 片桐鉄也氏、Little by Little 多米530運動部 東陽中学校 和田蒼平氏並びに友永英雄氏。皆さまに心より厚く御礼を申し上げます。



令和7年7月

特定非営利活動法人 朝倉川育水フォーラム
理事長 大谷忠興

30年の歩み

年 号	活動の歩み	代表者
平成5年	・豊橋商工会議所100周年事業「地域ビジョン」策定	青木徳生
平成7年	・朝倉川育水フォーラム設立 「記念講演 富士真奈美」 ・朝倉川通信創刊 ・第1回朝倉川を歩く会を実施	
平成8年	・朝倉川ホテル放流(第1回:上寺門橋 250匹) ・ホテル保護・河川美化のための看板設置(5本) ・ホテル観察会開始(石巻三輪川) ・ホテル観察会(多治見市 北小木川) ・「日本ホテルの会」シンポジウム参加 ・グラウンドワーク フォーラムイン東海に パネリストとして参加 ・「セブン・イレブンみどりの基金」より活動助成	
平成9年	・多米小学校へホテル飼育セット寄贈 育水フォーラム多賀谷理事が育成方法指導 ・嵩山小学校へホテル飼育セット寄贈 ・第1回朝倉川530大会始まる: 参加者1,500名 第1回のゴミの量50トン ・「朝倉川流域ビジョン」策定(日本ホテルの会にて作成) ・PR啓発用パンフレット作成 ・河川法改正	
平成10年	・ビオトープ建設にともないビオトープ先進地見学 ・協働団体「多米の里山づくりを楽しむ会」設立 ・第1回朝倉川植樹大会始まる(水辺のみどりの回廊計画)	
平成11年	・多米町ビオトープ牛舎撤去工事 ・特定非営利活動法人認証(5月14日法人届) 愛知県第1号認証 ・「環境を考える」ツアー実施 ・ビオトープ起工式(施工にあたり、豊橋ロータリークラブを始め各種団体の寄附をいただく)	寺本和子
平成12年	・「いい川づくり」の「いい川」部門準グランプリ受賞	
平成13年	・自転車・歩行者専用道路(多米橋～風木橋) ・朝倉川河川環境調査報告書作成 ・「韓国ホテル研究会」来訪 ・国際ホテルシンポジウム(韓国城南市)にて育水フォーラム常務理事 西川幸孝氏が講演 ・林委員長(岐阜大教授)を中心に「里山ビジョン」策定	

年 号	活動の歩み	代表者
平成14年	・「いい川・いい川づくり」視察 ・「朝倉川河川調査」始まる 各季節の年4回 5箇所による定点観測	寺本和子
平成15年	・朝倉川水辺協議会発足 ・HPリニューアル ・「朝倉川環境マップ」HP開設 ・第1回植樹メンテナンス大会始まる(植樹大会を終了し、植えた樹木のメンテナンスを行なう。)	
平成16年	・「井原第二公園」ビオトープ創りはじまる ・「浄化槽タウンミーティング愛知」(岡崎市)に育水フォーラム副理事長 荒木仁子氏がパネリストとして参加 ・「朝倉川ミーティング」愛知・川の会現地交流会実施	
平成17年	・パチンコ大衆文化・福祉応援賞受賞(万博会場にて) ・大貝委員長(豊橋技科大教授)を中心に「朝倉川流域ビジョン2005」の策定	
平成18年	・水辺協議会にて「朝倉川流域ビジョン2005」発表 ・第17回「みどりの愛護」国土交通大臣賞受賞 ・「水循環再生指標」作成のためのワークショップに参加	
平成19年	・第27回「緑の都市賞」国土交通大臣賞受賞 (2年連続豊橋の市民活動団体が受賞) ・「東三河地域水循環再生地域協議会」に参加	高橋豊彦
平成20年	・「環境保全功労者」愛知県知事表彰 ・中部の未来創造大賞 中部経済連合会賞受賞 ・COP10事業 「生物多様性から見た 東三河の森・川・海」のにパネリストとして育水フォーラム理事長高橋豊彦氏参加 ・農山漁村(ふるさと)地域力支援モデル事業アドバイザーに高橋理事長就任	
平成21年	・第13回朝倉川530大会にて鳥インフルエンザで豊橋の養鶏事業者への応援の気持ちをこめて、「がんばれ 530のまち うずらのまち 豊橋」の応援メッセージをかけたウズラの燻製を参加者2,800名に配布 ・愛知県副知事 稲垣隆司氏を迎えCOP10をひかえ生物多様性に関する記念講演開催 ・平成21年度環境保全功労者表彰式にて環境大臣賞 受賞	
平成22年	・当会の活動理念の基軸にもなっている「育水」という言葉を商標登録(平成23年3月25日認証 登録第5400882号) ※「育水」という考え方をしっかりとした形で普及していきたいという考えかたのもと登録をさせていただいています。	
平成23年	・朝倉川530大会にてリサイクル品の処分費用の捻出の為の募金活動開始 ・井原第二公園にてホタルの幼虫の放流 ・豊橋才能教育幼稚園との協働事業 (24年2月:下記の井水くみ上げポンプの故障による濁水の対策事業の一環)	
平成24年	・滝ノ谷池ビオトープの隣接地を土地所有者の善意により、約700㎡の拡張工事 ・豊橋東ライオンズクラブからビオトープ内手洗い施設設置 ・HPにfacebookのタイムラインを表示し、情報発信機能を充実 ・「朝倉川通信」のバックナンバー(PDF版)をHP上に公開	高橋豊彦
平成25年	・第17回朝倉川530大会にて豊橋警察署との連携開始 ・井原第二公園にて孵化したての幼虫1000匹(8月)と終齢幼虫150匹(2月)放流 ・あいち生物多様性政略2020推進委員会 委員に高橋理事長就任	
平成27年	・「朝倉川流域ビジョン2015」を発表	
平成28年	・「朝倉川流域ビジョン2015」の内容について佐原豊橋市長に提言するとともに、豊橋市内の小中学校74校の図書館に寄贈 ・東三河生態系ネットワークフォーラム2016で、朝倉川流域ビジョン2015の内容について講演 ・朝倉川育水フォーラム×みやこ大自然学校コラボ企画「とよはし森の幼稚園」を滝ノ谷池ビオトープで実施	
平成29年	・井原第二公園の今後の新たな方向性として、「地域の子どものための親水の場」というコンセプトを提案しつつ、「ホタルの育成ありき…」という、偏ったイメージを取り払っていくためにも、行政や地域の方々と一緒に改善作業の要望などを管理者である豊橋市と協議 ・三河生物同好会が「豊橋市多米町滝ノ谷ビオトープ自然環境調査報告書(1999～2016)」を作成 ・【里川リーダー養成講座】の講師として参加 ・豊橋田原ゴミ処理施設整備計画検討委員会委員に高橋理事長が選任	
平成30年	・台風12号の影響で、ビオトープ内の杉が倒れる ・山梨県と「育水」に関する協同利用の協定を締結 ・9月19日を「育水の日」に制定される	高橋豊彦
平成31年	・井原第二公園まちなかビオトープにに終齢幼虫100頭を放流(3/6)	
令和元年	・「朝倉川通信」にてリレーコラム「ホタルの環」の連載開始 ・アメーバブログでの情報発信を開始	

年 号	活動の歩み	代表者
令和2年	・第24回「朝倉川530大会」新型コロナウイルス感染拡大防止の観点により中止 ・朝倉川通信のWeb版のみに変更 ・豊橋出身のデザイン書道家 鈴木愛さんに依頼し「育水」のロゴを作成。ユニフォームも新デザインで作成	
令和3年	・滝ノ谷池ビオトープ入口看板の入れ替え ・滝ノ谷池ビオトープをフィールドにとよはしプレーパーク活動の開催実施(毎月第3土曜日) ・とよはしまちなか図書館に「朝倉川流域ビジョン2015」「朝倉川流域ビジョン2005」を寄贈展示 ・愛媛県西条市と「育水」に関する協同利用の協定を締結 ・人間環境大学と滝ノ谷池ビオトープで、コウモリの種類と生息分布域把握調査を実施	
令和4年	・滝ノ谷池ビオトープ利用ガイドラインとして「滝ノ谷池ビオトープの利用心得に関する九箇条」を作成 ・フジクリーン工業様の発行する「水の話」で山梨県の育水活動と朝倉川育水フォーラムの活動を紹介 ・とよはしプレーパーク・重度心身がよい児支援施設みらいおんさまと協働で収穫祭を実施 ・NHKダーウィンが来た!「大追跡! 謎の登山ガエル」で滝ノ谷池ビオトープのアズマヒキガエルの写真を使用	
令和5年	・6月2日東三河豪雨に伴う赤岩寺の鯉の朝倉川本川流入を受け、鯉の保護と赤岩寺への返還活動実施 ・豊橋市、多米校区自治会、猟友会と協働でヌートリア駆除活動の支援を開始 ・公益社団法人 日本水環境学会 中部支部賞 受賞 ・環境功労者 愛知県表彰 ・日本爬虫両生類学会第62回船橋大会にて「アカハライモリ「渥美種族」の分布範囲について」の発表に大谷忠興理事長が共同研究者として参加 ・名古屋大学大学院 生命農学研究科 森林保護学研究室と協働でネバタゴガエルの生態調査を滝ノ谷池ビオトープにて実施(令和6年まで継続)	大谷忠興
令和6年	・日本爬虫両生類学会 第63回姫路大会の「アカハライモリ「渥美種族」とその周辺集団の形態形質の比較」の発表に大谷理事長が共同研究者として参加 ・第14回中部森林学会大会にて「山地源流域に生息するネバタゴガエルの水域環境利用様式の解明:中部地方固有種の保全をめざして」の発表に大谷理事長が共同研究者として参加(11月) ・井原第二公園まちなかビオトープの井水くみ上げポンプの故障による流路水量の不足	
令和7年	・公益社団法人日本動物園水族館協会(JAZA)通常総会およびシンポジウムにて、「特定非営利活動法人朝倉川育水フォーラムの理念と活動～自然と都市とのより良い共生の創出における研究機関との連携～」を講演、「渥美半島に残存していた2種の希少な有尾類」をテーマとしたパネルディスカッションに大谷理事長が登壇 ・豊橋市表彰(環境保全)受賞 ●創立30周年を迎える ・「朝倉川流域ビジョン2025」を発表	

参考文献

藤田朝彦、武内啓明、川瀬成吾、細谷和海(編)、内山りゅう(写真)、『山溪ハンディ図鑑15 増補改訂日本の淡水魚』、山と溪谷社、2019。 / 梅村算二、『愛知県の淡水魚類』、自費出版、1993。 / 小山舜二、堀正和、加藤貞亨(編)、『新城市の魚類目録新城市の自然誌 昆虫・動物編』、新城市立鳳来寺山自然科学博物館、2014。 / 浅香智也、『豊川の魚3(豊川上水辺保全会の生息魚類調査と外来魚駆除)』、『あかつかやま』、2019年、No.84。豊川市赤塚山公園 / 国土交通省 中部地方整備局、「令和4年度中部地方ダム等管理フォローアップ委員会 寒狭川堰 定期報告書【概要版】」。https://www.cbr.mlit.go.jp/kawatomizu/dam_followup/pdf/r04_iinkai/r04_iinkai_3.pdf、 / 国立環境研究所、「コイ 侵入生物データベース」。<https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/50550.html>、 / 外来生物バスターズモデル事業実行委員会、「2021外来生物マニュアル No.18 コイ」、横須賀市。https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/5555/bustres/documents/gb_18.pdf、 / 谷口義則、「タイリクバラタナゴ」、『愛知県の外来種 ブルーデータブック あいち2021』、愛知県環境局環境政策部自然環境課、2021。 / 谷口義則、「オイカワ」、『グリーンデータブックあいち 2018 汽水・淡水魚類編』、愛知県環境局環境政策部自然環境課、2018。 / 谷口義則、「カワムツ」、『グリーンデータブックあいち 2018 汽水・淡水魚類編』、愛知県環境局環境政策部自然環境課、2018。 / ぼうずコンニャクの市場魚貝類図鑑、「アブラハヤ」。<https://www.zukan-bouz.com/syu/アブラハヤ/>、 / 谷口義則、「タモロコ」、『グリーンデータブックあいち 2018 汽水・淡水魚類編』、愛知県環境局環境政策部自然環境課、2018。 / 鳥居亮一、「ドジョウ」、『レッドデータブックあいち2020 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編』、愛知県環境局環境政策部自然環境課、2020。 / 松井彰子、中島淳、「大阪府におけるドジョウの在来および外来系統の分布と形態的特徴にもとづく系統判別法の検討」、『大阪市立自然科学史博物館研究報告74号』、大阪市立自然科学史博物館、2020。 / 谷口義則、「ニシシマドジョウ」、『グリーンデータブックあいち 2018 汽水・淡水魚類編』、愛知県環境局環境政策部自然環境課、2018。 / 谷口義則、「ニシシマドジョウ」、『レッドデータブックあいち2020 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編』、愛知県環境局環境政策部自然環境課、2020。 / 向井貴彦、「トウカイゴガタスジシマドジョウ」、『レッドデータブックあいち 2020 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編』、愛知県環境局環境政策部自然環境課、2020。 / 浅香智成、「ホトケドジョウ」、『レッドデータブックあいち2020 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編』、愛知県環境局環境政策部自然環境課、2020。 / 谷口義則(監修)、「生きもののノートシリーズ わき水の守り番 ホトケドジョウ」、『Toyota Technical Center Shimoyama』、トヨタ自動車株式会社。https://global.toyota/pages/global_toyota/sustainability/esg/challenge2050/challenge6/learning04_all.pdf、2022。 / 浅香智成、「トウカイナガレホトケドジョウ」、『レッドデータブックあいち2020 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編』、愛知県環境局環境政策部自然環境課、2022。 / 谷口義則、「ナマズ グリーンデータブックあいち 2018 汽水・淡水魚類編』、愛知県環境局環境政策部自然環境課、2018。 / 国立環境研究所、「ナマズ 侵入生物データベース」。<https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/50800.html>、 / 谷口義則、「アユ 愛知県の生物多様性」、『グリーンデータブックあいち2018』、愛知県環境局環境政策部自然環境課、2018。 / 【公式】愛知県東栄町の観光サイト 東栄町のじかん。「東栄町 鮎特集」、東栄町観光まちづくり協会。<https://www.toeinavi.jp/spots/ayu/>、 / 鳥居亮一、「ニホンウナギ」、『レッドデータブックあいち2020 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編』、愛知県環境局環境政策部自然環境課、2020。 / 環境省、「ニホンウナギの生息地保全の考え方」、環境省自然環境局野生生物課、2017。<https://www.env.go.jp/content/900491527.pdf>、 / 国立環境研究所、「タウナギ 国立環境研究所 侵入生物データベース」。<https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/50280.html>、 / 鳥居亮一、「ミナミメダカ」、『レッドデー

タブックあいち2020 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編』愛知県環境局環境政策部自然環境課, 2020. / 竹花佑介, 北川忠生, 「メダカ:人為的な放流による遺伝的攪乱」, 『シリーズ-日本の希少魚類の現状と課題 魚類学雑誌 57(1)』, 日本魚類学会, 2010. / 東愛知新聞, 「豊橋の長三池にメダカ放流」, 2018-09-27 <https://www.higashiaichi.co.jp/news/detail/3584>, 2024-11-24. / 谷口義則, 鳥居亮一, 「カダヤシ 愛知県の外来種」, 『ブルーデータブックあいち2021』, 愛知県環境局環境政策部自然環境課, 2021. / 国立環境研究所, 「カダヤシ 侵入生物データベース」, <https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/50230.html>, / 谷口義則, 「オオクチバス 愛知県の外来種」, 『ブルーデータブックあいち2021』, 愛知県環境局環境政策部自然環境課, 2021. / 国立環境研究所, 「オオクチバス 侵入生物データベース」, <https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/50330.html>, / 谷口義則, 鳥居亮一, 「ブルーギル 愛知県の外来種」, 『ブルーデータブックあいち2021』, 愛知県環境局環境政策部, 2021. / 国立環境研究所, 「ブルーギル 侵入生物データベース」, <https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/50310.html>, / 谷口義則, 「ウツセミカジカ」, 『レッドデータブックあいち2020 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編』, 愛知県環境局環境政策部自然環境課, 2020. / 谷口義則, 浅香智也, 荒尾一樹, 大仲友樹, 地村佳純, 鳥居亮一, 向井貴彦(編著), 『レッドデータブックあいち2020 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編(淡水魚類)』, 愛知県環境局環境政策部自然環境課, 2020. / 島田知彦, 矢部隆(編著), 『レッドデータブックあいち2020 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編(爬虫類)』, 愛知県環境局環境政策部自然環境課, 2020. / 島田知彦(編著), 『レッドデータブックあいち2020 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編(両生類)』, 愛知県環境局環境政策部自然環境課, 2020. / 吉田雅澄, 安藤尚, 高崎保郎, 岡田正哉(故人), 水野利彦, 矢崎充彦, 浅岡孝知, 澤田宗一郎, 長谷川道明, 大平仁夫, 蟹江昇, 戸田尚希, 伊澤和義, 山崎隆弘, 真野隆裕, 廣永輝彦, 西本浩之, 江田信豊, 高橋匡司, 高橋昭, 魚住泰弘, 大草伸治(編著), 『レッドデータブックあいち2020 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編(昆虫類)』, 愛知県環境局環境政策部自然環境課, 2020. / 緒方清人, 須賀英文(編著), 『レッドデータブックあいち2020 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編(クモ類)』, 愛知県環境局環境政策部自然環境課, 2020. / 木村昭一, 早瀬善正(編著), 『レッドデータブックあいち2020 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編(貝類)』, 愛知県環境局環境政策部自然環境課, 2020. / 芹沢俊介, 村松正雄, 成田務, 山田耕作(編著), 『レッドデータブックあいち2020 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 植物編』, 愛知県環境局環境政策部自然環境課, 2020. / 『環境省レッドリスト 2020』, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室, 2020. / 国立環境研究所野生生物多様性領域データベース / ツール: BioWM 生物多様性の保全, 国立環境研究所 / 浅香智也, 鳥居亮一, 向井貴彦, 地村佳純, 大仲知樹, 荒尾一樹, 谷口義則(編著), 『グリーンデータブックあいち 2018 汽水・淡水魚類編』, 愛知県環境局環境政策部自然環境課, 2018. / 『愛知県の外来種 2021』, 『ブルーデータブックあいち2021』, 愛知県環境局環境政策部自然環境課, 2021. / 『愛知県特定外来生物対策ハンドブック 2023』, 愛知県環境局環境政策部自然環境課, 2023. / 長谷川明子, 高橋伸夫, 矢部隆, 島田知彦, 芹沢俊介, 谷口義則, 間野隆裕, 水野利彦, 戸田尚希, 江田信豊, 吉田雅澄, 渡邊幹男, 瀧崎吉伸, 齋竹善行, 梶野保光(編著), 『2020みんなで調べよう! あいちの生物多様性モニタリングハンドブック』, 愛知県環境局環境政策部自然環境課, 2020. / 浅岡孝知, 神戸敦, 瀧崎吉伸, 藤岡エリ子(編著), 『豊橋の自然探検〜守ろう! とよはしネイチャースポット2016〜』, 豊橋市環境部環境保全課, 2016. / 『まもりたい静岡県の野生生物2019 静岡県レッドデータブック(動物編)』, 静岡県くらし・環境部環境局自然保護課, 2019. / 梅村尊二(編著), 『愛知県の淡水魚』, 自費出版, 1993. / 小山舜二, 堀正和, 加藤貞亨(編著), 『新城市の魚類目録 新城市の自然誌 昆虫・動物編』, 新城市立鳳来寺山自然科学博物館, 2014. / 浅香智也(編著), 『豊川の魚3(豊川上水辺保全会の生息魚類調査と外来魚駆除) あかつかやまNo.84』, 豊川市赤塚山公園, 2019 / 島田知彦(編著), 「古井戸から50年ぶりの再発

見・アカハライモリ渥美種族」, 『Press Release(2025-01-06)』, 愛知教育大学, 2025. / 島田知彦, 松井正文, 田中溪登(編著), 「身近な生き物に隠れていた新種 ヒガシニホンアマガエルが, 愛教大と京大の共同チームにより明らかになる」, 『Press Release(2025-02-21)』, 愛知教育大学, 2025. / 川添宣広(編著), 『見分けられる! 種類がわかる! 増補改訂 日本の爬虫類・両生類生態図鑑』, 誠文堂新光社, 2020. / 向井貴彦, 森部純嗣, 楠田哲士, 田上正隆(編著), 『岐阜県の動物-哺乳類・爬虫類・両生類・十脚類-』, 岐阜新聞社, 2021. / 松橋利光, 奥山風太郎, 神谷有二, 伊知地英信(編著), 『山溪ハンディ図鑑9 日本のカエル+サンショウウオ類』, 山と溪谷社, 2002. / 梶真史, 伊丹市昆虫館(編著), 『日本の昆虫1400①チョウ・バタ・セミ』, 文一総合出版, 2013. / 梶真史, 伊丹市昆虫館(編著), 『新日本の昆虫1900①チョウ・バタ・セミ』, 文一総合出版, 2024. / 梶真史, 伊丹市昆虫館(編著), 『日本の昆虫1400②トンボ・コウチュウ・ハチ』, 文一総合出版, 2013. / 梶真史, 伊丹市昆虫館(編著), 『新日本の昆虫1900②トンボ・コウチュウ・ハチ』, 文一総合出版, 2024. / 三田村敏正, 平澤桂, 吉井重幸, 北野忠(編著), 『水生昆虫①ゲンゴロウ・ガムシ・ミズスマシ』, 文一総合出版, 2018. / 小池啓一, 小野展嗣, 町田龍一郎, 田辺力, 仲瀬葉子, 廣野篤(編著), 『小学館の図鑑NEO POCKET①昆虫』, 小学館, 2022. / 馬場友希, 谷川明雄(編著), 『クモ ハンドブック』, 文一総合出版, 2022. / 武田晋一, 西浩孝(編著), 『カタツムリ ハンドブック』, 文一総合出版, 2017. / 大西秀次郎(編著), 「ミナミヌマエビ」, 『愛媛県レッドデータブック2014』, 愛媛県庁自然保護課, 2014. / 本田隆斗, 日野輝明(編著), 『愛知県豊川川流域に生息する淡水性エビ類の分布と生息環境』, 名城大学農学部, 2022. / 笠井文絵, 石本美和, 『しじくもフィールドガイド(PDF)』, 国立環境研究所, 2011. / 小林真吾(編著), 『アオカワモズク チャイロカワモズク』, 『愛媛県レッドデータブック2014』, 愛媛県庁自然保護課, 2014. / 松井彰子, 中島淳(編著), 『大阪府におけるドジョウの在来および外来系統の分布と形態的特徴にもとづく系統判別法の検討』, 大阪自然史博物館研究報告 第74号, 2020. / 魚類 - 市場魚貝類図鑑 ぼうずコンニャク / 『令和4年度中部地方ダム等管理フォローアップ委員会 寒狭川堰定期報告書【概要版】』, 国土交通省中部地方整備局, 2022. / 大庭伸也(編著), 「シュレーゲルアオガエルの生態や観察のポイント - 生きもの図鑑」, 「HONDAキャンプ」, <https://www.honda.co.jp/outdoor/knowledge/adventure/picture-book/schlegelaogaeru>, / 川邊透(編著), 「昆虫エクスプローラ」, <https://www.insects.jp/kontyu.htm>, / 築地琢朗(編著), 「虫ナビ」, <https://mushinavi.com/>, / 田口綾乃(編著), 「サツマヒメカマキリを求めて」, 「東京農業大学昆虫学研究室」, <https://www.nodai.ac.jp/agri/original/konken/shigen/Fieldworks/202003hyogo01/202003hyogo01.html>, / 「日本産ヒメカマキリ属2種の形態比較(メス)」, 「虫草屋」, <https://dianthussuperbus.blog.fc2.com/blog-entry-47.html>, 2022. / 田中幸一(編著), 「農耕地におけるクモ類の働き」, 『植物防疫』, 農林水産省九州農業試験場, 1989, 第43巻第1号. / 竹中明夫(編著), 「生態系機能と生態系サービス」, 『国立環境研究所ニュース』, 国立環境研究所, 2002, 21巻3号. / 「三河の植物観察」, <https://mi-kawanoyasou.org/>, / 長田武正(編著), 『検索入門 野草図鑑』, 保育社. / 清水建美(編著), 『高原と高山の植物』, 保育社. / 越澤中峰(編著), 『東海・近畿地方で確認された外来種タテジマカマキリモドキ(新称)』, 『東海自然誌 早期公開版』, ふじのくに地球環境史ミュージアム, 2025, 第18号. / 高橋豊彦(編著), 「朝倉川とともに…子どもたちの経験を持続可能なカラに」, 『朝倉川流域ビジョン 2015 特定非営利活動法人朝倉川育水フォーラム20周年記念誌』, 2015.

図鑑索引

ア

アオオニグモ	237
アオカナブン	175
アオカワモズク	65
アオグロハシリグモ	244
アオスジアゲハ	200
アオズムカデ	247
アオダイショウ	125
アオドウガネ	176
アオハナムグリ	177
アオマツムシ	149
アオメアブ	196
アカエグリバ	221
アカガネアオハムシダマシ	182
アカタテハ	205
アカテガニ	56
アカハナカミキリ	190
アカハバヒロオキノコ	184
アカハライモリ(渥美種族)	112
アカハライモリ(中間種族)	112
アカボシゴマダラ(大陸亜種)	207
アカモンコナミシヤク	215
アカアカネ	140
アカカマツ	274
アケビ	263
アケビコノハ	221
アサギマダラ	208
アサヒナカウトンボ	135
アサマイチモンジ	206
アジアイトトンボ	137
アシグロツユムシ	154
アシダカグモ	245
アシマダラアカサシガメ	163
アシヨレグモ	242
アズチグモ	241
アズマヒキガエル	67
アブラゼミ	166
アブラハヤ	25
アメリカザリガニ	53
アメリカタカサブリウ	267
アメリカフウロ	264
アユ	32
アレチヌスギトハギ	272

イ

イオウイロハシリグモ	244
イシマキガイ	60
イセノナミマイマイ	251
イタドリ	262
イタドリハムシ	191
イチモンジセセリ	210
イヌタデ	276
イボバツ	146
イワタカンアオイ	277

ウ

ウキゴリ	44
ウシガエル	91
ウシカメムシ	165
ウスカワマイマイ	252
ウスキツバメエダシヤク	213
ウスギヌカギバ	212
ウスグモズ	150
ウスバカゲロウ	193
ウスバカミキリ	187
ウスバキトンボ	140
ウスバシロチョウ	200
ウツセミカジカ	40
ウデグヒメホソアシナガバエ	198
ウバタマムシ	179
ウマノスズクサ	263
ウマビル	254
ウメスカシクロバ	212
ウラギンシジミ	202
ウラゴマダラシジミ	203
ウラナミシジミ	204
ウリハムシ	191

エ

エソノギシギシ	261
エソハルゼミ	169
エダナナフシ	156
エビガラスズメ	217
エビモ	63
エントツドロバチ	227
エンマコオロギ	150

オ

オイカワ	23
オオアイトトンボ	135
オオイヌノフグリ	259
オオイヌホオズキ	277
オオカナダモ	63
オオガハス	267
オオカマキリ	158
オオギセル	253
オオクチキムシ	183
オオクチバス	38
オオゲジ	248
オオケマイマイ	252
オオゴキブリ	157
オオシオカラトンボ	144
オオジシバリ	257
オオシロカネグモ	239
オオスカシバ	216
オオスズメバチ	224
オオセイボウ	223
オオセンチュウガネ	177
オオソウムシ	186
オオタニシ	61
オオツノトンボ	194
オオトモエ	220
オオトリノフンダマシ	236

オオバコヤガ	221
オオハナアブ	196
オオフトモンウバタコメツキ	180
オオホシカメムシ	164
オオマリコケムシ	62
オオミズアブ	215
オオミズマシ	172
オオモンクワモバチ	227
オオヤマカワグサ	144
オオツツシハナカミキリ	189
オオミズマシ	172
オオジロアシナガソウムシ	186
オナガグモ	240
オニグモ	237
オニドコロ	273
オニヤンマ	139
オビヒトリ	219
オヘビイチゴ	260
オンブバッタ	148

カ

ガガイモ	267
カキバトモエ	221
カクムネニボタル	182
カジカガエル	110
カタジロゴマフカミキリ	188
カダヤシ	37
カツオソウムシ	186
カドマルエンマコガネ	177
カナムシ	273
カニグモ属の一種	242
カバエダシヤク	212
カブトムシ	175
カマツカ	27
カラスアゲハ	199
カラスノエンドウ	261
カレハヒメグモ	240
カウニナ	60
カワムツ	24
カワヨシノボリ	41

キ

キアゲハ	199
キアシナガバチ	226
キアシハエトリ	246
キイトンボ	136
キイロカミキリモドキ	191
キイロスズメバチ	225
キオヒゴマダレエダシヤク	213
ギギ	32
キゴシハナアブ	197
キシタバ	220
キシヨウブ	268
キジロオヒキグモ	233
キスゲフクレアブラムシ	170
キスジセアカカギバラバチ	230
キスミレ	259
キタキチョウ	201
キタテハ	204
キツネノボタン	262

キツネノマゴ	275
キノコゴミムシ	174
キハダエビグモ	242
キハラゴマダラヒトリ	219
キボシカミキリ	188
キマダラカメムシ	165
キマダラセセリ	211
キマダラハナバチ属の仲間	230
キマダラミヤマカミキリ	187
キムネクマバチ	229
キュウリグサ	263
キンケハラナガツチバチ	230
ギンブナ	21
ギンボシリンガ	222
ギンメッキゴミグモ	236
キンモンガ	222
ギンヤンマ	139

ク

クサガメ	122
クサギカメムシ	165
クサキリ	152
クシヘゲニボタル	182
クス	271
クスサン	216
クチキコオロギ	150
クチバズメ	218
クツツムシ	153
クビキリギス	152
クマゼミ	167
クマダハナグモ	242
クモノミズキ	271
クモヘリカメムシ	164
クリアナアキソウムシ	186
クルマバツ	146
クルマバツタモドキ	146
クレソン	264
クローアゲハ	199
クローオアリ	224
クロクシコメツキ	180
クロゲンゴロウ	170
クロゴキブリ	157
クロコノマチョウ	210
クロスジギンヤンマ	140
クロスズメバチ	225
クロテンフユシヤク	214
クロハナムグリ	177
クロハネシロヒゲナガ	223
クロヒカゲ	208
クロベンケイガニ	55
クロボシツツハムシ	192

サ

サギゴケ	263
ササキリ	153
ササグモ	243
ササコナフキツノアブラムシ	170
ササノハガイ	59
ササユリ	265
サツマノミダマシ	237
サツマヒメカマキリ	159
サトキマダラヒカゲ	209
サトクダマキモドキ	154
サビキコリ	180
サワガニ	54
サワヒヨドリ	268

ケ

ケバクトゲアシヒゴソソウムシ	187
ケボウグモ	233
ケラ	150
ゲンジボタル	9

コ

コアシダカグモ	245
コイシシジミ	19
ゴイシシジミ	202
コウガイセキショウ	262
コウガイビル属の一種	255
コウライモロコ	26
コオムシ	160
コオニヤンマ	138
コカスリウスバカゲロウ	193
コガタコガネグモ	234
コガタスズメバチ	225
コガタリハムシ	191
コガネグモ	234
コカマキリ	159
コガムシ	171
ゴクラクハゼ	43
コクワガタ	178
コゲチャオニグモ	238
コゴメガヤツリ	273
コシマゲンゴロウ	171
コシロカネグモ	239
コシロシタバ	219
コセアカアメンボ	162
コチャバネセセリ	210
コナラの芽生え	278
コノシメトンボ	141
コハナグモ	241
コバネナゴ	147
コブナグサ	276
ゴマダラカミキリ	188
ゴマフボクトウ	222
コマルハナバチ	229
ゴミグモ	236
コムスジ	207
コムラサキ	207
コロギス	155

シ

シギゴケ	263
シサキリ	153
シサグモ	243
シサコナフキツノアブラムシ	170
シサノハガイ	59
シサユリ	265
シツマノミダマシ	237
シツマヒメカマキリ	159
シタキマダラヒカゲ	209
シタクダマキモドキ	154
シビキコリ	180
シワガニ	54
シワヒヨドリ	268

シ

シーボルトミミズ	255
シオカラトンボ	143
シオヤアブ	196
シオヤトンボ	143
シマアメンボ	163
シマヘビ	126

シマヨシノボリ	42
シムグリ	128
シモフリコメツキの仲間	181
シモフリスズメ	217
シモフリヤチグモ	243
ジャコウアゲハ	200
シヤジクモ	65
ジュスダマ	270
シュレーゲルアオガエル	102
ジョウカイボン	182
ジョウジョウバカマ	258
ショウブ	268
ショウリョウバッタ	148
ジョロウグモ	239
シラスゲ	269
シラホシカミキリ	191
シロスジアオヨトウ	221
シロシジカミキリ	188
シロバナゲンノショウコ	274
シロバナタンポポ	257
シロボウエンゴサク	257
シロマダラ	129

ス

スイバ	261
スクミリンゴガイ	62
スジアオゴミムシ	174
スジエビ	52
スジコガネ	176
ススカアザミ	276
スズミグモ	235
スズムシ	148
スズメウリ	270
スズメノテッポウ	261
スナガニ	56
スミウキゴリ	45

セ

セアカゴケグモ	241
セアカヒラタゴミムシ	174
セイトアカワダチソウ	274
セイヨウタンポポ	275
セイヨウミツバチ	228
セキショウ	268
セグロアシナガバチ	226
セグロベニモンツノカメムシ	166
セスジアカムカデ	247
セスジスズメ	218
セスジビル	254
セボシジョウカイ	182
セマダラコガネ	176
センダン	265
センニンソウ	269
センノキカミキリ	188

タ

タイコウチ	161
ダイミョウセセリ	211
タイリクバラタナゴ	22

□ タウナギ	34
□ タカサゴキララマダニ	249
□ タガメ	160
□ タガラシ	262
□ タケクマバチ	229
□ タチツボスミレ	259
□ タテスジマキリモドキ	194
□ タネツケバナ	258
□ タモロコ	26
□ タンドラテントウ	185

チ

□ チカイエカ	195
□ チズモンアオシヤク	212
□ チヤスジハエトリ	246
□ チャバネセセリ	210
□ チュウガタコガネグモ	234
□ チュウガタンロカネグモ	240
□ チュウゴクアミガサハゴロモ	169
□ チョウセンカマキリ	158

ツ

□ ツクツクボウシ	168
□ ツチイナゴ	147
□ ツチガエル	93
□ ツノアオカメムシ	165
□ ツバメシジミ	203
□ ツマキチョウ	201
□ ツマキホシハマキモドキ	223
□ ツマグロオオヨコバイ	169
□ ツマグロキンバエ	197
□ ツマグロバツタ	147
□ ツマグロヒョウモン	206
□ ツムガタギセル	253
□ ツヤアオカメムシ	164
□ ツクサ	272
□ ツルマメ	271

テ

□ テイカズラ	265
□ テーニツツハエトリ	245
□ テナガエビ	51
□ テングチョウ	204

ト

□ トウカイタンポポ	257
□ トウキョウヒメハンミョウ	171
□ トウバナ	262
□ トクダミ	266
□ トゲアリ	224
□ トゲナナフシ	156
□ トゲヒシバツタ	148
□ トジョウ	28
□ トノサマガエル	86
□ トノサマバツタ	145
□ トビズムカデ	247
□ トビシテントウ	185

ナ

□ ナカグロクチャバ	221
□ ナガコガネグモ	235
□ ナガメ	166
□ ナガラタゴガエル	76
□ ナゴヤダルマガエル	89
□ ナズナ	258
□ ナツアカネ	141
□ ナナフシモドキ	156
□ ナナホシテントウ	185
□ ナベブタムシ	162
□ ナマズ	31
□ ナミアゲハ	198
□ ナミスジフユナミシヤク	214
□ ナミハナアブ	196
□ ナミハンミョウ	173

ニ

□ ニイニイゼミ	167
□ ニシシマドジョウ	29
□ ニッポンヒゲナガハナバチ	228
□ ニッポンマイマイ	252
□ ニホンアカガエル	80
□ ニホンイシガメ	121
□ ニホンウナギ	33
□ ニホンカナヘビ	133
□ ニホンキマワリ	183
□ ニホンスッポン	124
□ ニホントビナナフシ	157
□ ニホンヒメフナムシ	248
□ ニホンマムシ	130
□ ニホンミツバチ	228
□ ニホンヤマビル	254
□ ニホンヤモリ	133
□ ニワハンミョウ	173

ヌ

□ ヌスビトハギ	272
□ ヌマガイ	58
□ ヌマガエル	96
□ ヌマトラノオ	266

ネ

□ ネグロセンブリ	193
□ ネバタゴガエル	72
□ ネブトクワガタ	178
□ ネムノキ	267

ノ

□ ノコギリカミキリ	187
□ ノコギリクワガタ	179
□ ノコメトガリキリガ	222
□ ノコンギク	275
□ ノミノフスマ	260
□ ノリウツギ	266

ハ

□ ハイイロゲンゴロウ	171
□ ハグロトンボ	136
□ ハスジカツオソウムシ	186

□ ハスノハカヅラ	269
□ ハツチョウトンボ	142
□ ハナイバナ	263
□ ハナタデ	275
□ ハヤシウマ	155
□ ハヤシノウマオイ	152
□ ハラグロオオテントウ	184
□ ハラクロコモリグモ	243
□ ハラヒロカマキリ	158
□ ハラヒロトンボ	143
□ ハリカメムシ	164
□ ハリゲコモリグモ	244
□ ハルジオン	264
□ ハンカイソウ	265

ヒ

□ ヒカゲチョウ	208
□ ヒガシキリギリス	151
□ ヒガシニホンアマガエル	99
□ ヒガシニホントカゲ	132
□ ヒガシヒダサンシヨウウオ	119
□ ヒガンバナ	272
□ ヒグラシ	168
□ ヒクメツキ	181
□ ヒゲナガカワトビケラ	198
□ ヒゲナガサシガメ	164
□ ヒゲナガハナノミ	181
□ ヒサゴクサキリ	153
□ ヒナバタ	146
□ ヒバカリ	128
□ ヒメアカタテハ	205
□ ヒメアカネ	142
□ ヒメアシナガコガネ	176
□ ヒメウス	277
□ ヒメウラナミジャノメ	209
□ ヒメオドリコソウ	260
□ ヒメオビオキノコ	184
□ ヒメカマキリ	159
□ ヒメガムシ	172
□ ヒメカメノコテントウ	184
□ ヒメギス	151
□ ヒメクダマキモドキ	154
□ ヒメゲンゴロウ	171
□ ヒメジャノメ	208
□ ヒメスジコガネ	177
□ ヒメスズメバチ	225
□ ヒメタイコウチ	161
□ ヒメタニシ	60
□ ヒメツチハンミョウ	175
□ ヒメデオキノコムシ	175
□ ヒメヒオウギズイセン	266
□ ヒメヒカゲ	209
□ ヒメマイマイカブリ	174
□ ヒメミズカマキリ	162
□ ヒメヤママユ	215
□ ヒョウモンエダシヤク	213
□ ヒラタクワガタ	178
□ ヒラタドトムシ	172
□ ヒラテデナガエビ	51

□ ヒルガオ属の一種	267
□ ビロウドツリアブ	195
□ ビロードナミシヤク	215
□ ヒロオビトンボエダシヤク	214
□ ヒロハアマナ	259

フ

□ フキ	257
□ フクラスズメ	220
□ フサモ属の一種	64
□ フジ	265
□ フジハムシ	192
□ フタイロコヤガ	222
□ フタオビミドリトラカミキリ	189
□ フタツメオシロヒメシヤク	213
□ フタマエホシエダシヤク	213
□ フタモンアシナガバチ	227
□ フモトスミレ	258
□ ブルーギル	39

ヘ

□ ヘクソカズラ	270
□ ヘッコウクモバチ	227
□ ヘッコウハゴロモ	169
□ ヘニカミキリ	190
□ ヘニシジミ	202
□ ヘビイチゴ	260
□ ヘビトンボ	192

ホ

□ ホシベニカミキリ	190
□ ホシボウシヤク	216
□ ホソクビツユムシ	154
□ ホソトラカミキリ	190
□ ホソヒラタアブ	197
□ ホソミイトトンボ	137
□ ホタルイ	262
□ ホタルガ	211
□ ホタルカミキリ	189
□ ホタンツル	270
□ ホトケドジョウ	30
□ ホトケノザ	258
□ ホントクタデ	276

マ

□ マキノスミレ	259
□ マシジミ	59
□ マダラカマドウマ	155
□ マツカサガイ(東海固有種)	58
□ マツムシ	149
□ マツムシモドキ	149
□ マツモ	64
□ マツムモシ	162
□ マハゼ	40
□ ママコノシリヌグイ	274
□ マミクハエトリ	246
□ マメコガネ	176
□ マユタテアカネ	141
□ マルカメムシ	164

□ マルタニシ	61
□ マルツメオニグモ	236
□ マルバツユクサ	272
□ マルバノホロシ	273
□ マルバルコウ	268
□ マルボシヒラヤドリバエ	197

ミ

□ ミイデラゴミムシ	174
□ ミカドガガンボ	195
□ ミカワオサムシ	173
□ ミカワマイマイ	251
□ ミシシッピアカミミガメ	123
□ ミズカマキリ	161
□ ミズキボウシ	269
□ ミズヒキ	276
□ ミソカクシ	269
□ ミソソバ	274
□ ミドリヒョウモン	205
□ ミナミヌマエビ/カワリヌマエビ属の一種	52
□ ミナミヒメヒラタアブ	197
□ ミナミメダカ	35
□ ミヤマアカネ	142
□ ミヤマカワトンボ	136
□ ミヤマクロハナカミキリ	190
□ ミヤマクワガタ	179
□ ミンミンゼミ	167

ム

□ ムーアシロホシテントウ	185
□ ムカシヤンマ	137
□ ムクゲコノハ	220
□ ムシバミコガネグモ	235
□ ムラサキケマン	260
□ ムラサキシジミ	203
□ メハジキ	266
□ メンガタカスカメ	163
□ メンガタスズメ	218

モ

□ モクスガニ	55
□ モツゴ	25
□ モノサシトンボ	137
□ モモスズメ	217
□ モリアオガエル	106
□ モリチャバネゴキブリ	157
□ モンオナシカワゲラ	145
□ モンカゲロウ	135
□ モンキアゲハ	199
□ モンシロチョウ	201

ヤ

□ ヤツウクガビル	255
□ ヤニサシガメ	163
□ ヤブキリ	151
□ ヤブデマリ	264
□ ヤブマオ	270

□ ヤブマメ	271
□ ヤブヤンマ	139
□ ヤブラン	271
□ ヤマアカガエル	83
□ ヤマカガシ	127
□ ヤマサナエ	138
□ ヤマシロオニグモ	238
□ ヤマトアシナガバチ	226
□ ヤマトカワゲラ	144
□ ヤマトクロスジヘビトンボ	192
□ ヤマトコマチグモ	243
□ ヤマトサンシヨウウオ	118
□ ヤマトシジミ	203
□ ヤマトシリアゲ	194
□ ヤマトタムシ	180
□ ヤマトフツツメカワゲラ	145
□ ヤマトリノジガバチ	228
□ ヤマナメクシ	253
□ ヤマノイモ	273
□ ヤマハッカ	277
□ ヤママユ	216
□ ヤリグモ属の一種	240
□ ヤワラスゲ	264
□ ヤンバルトサカヤスデ	248

ユ

□ ユミアシゴミシダマシ	183
--------------	-----

ヨ

□ ヨコツナサシガメ	163
□ ヨダンハエトリ	246
□ ヨツスジハナカミキリ	189
□ ヨツボシケシキスイ	183
□ ヨツボシトンボ	144
□ ヨツモンカメノコハムシ	191
□ ヨメナ	275

リ

□ リスアカネ	141
---------	-----

ル

□ ルリシジミ	203
□ ルリタテハ	206

ワ

□ ワキグロサツマノミダマシ	238
□ ワクドツシジミ	233

その他

□ 春を待つゾロボウエンゴサク	277
□ 苔と茸	278

執筆者一覧

【朝倉川育水フォーラム】

大谷忠興 高橋豊彦 茅賀谷碩信 加藤博康 高須大輔

【図鑑学生執筆者】

時習館高等学校 元生物部部長 柴田哲平様（魚 類）
桜丘高等学校 元生物部副部長 伊藤憲伸様（爬虫類）
豊丘高等学校 伊奈稜一郎様（爬虫類/カメ）

Special Thanks !!

【ご寄稿いただいたパートナーの皆様】

多米校区自治会 会長川本恭久様
多米の里山づくりを楽しむ会 会長大木伸浩様
学校法人桜丘学園 理事長 満田康一様
株式会社サンルイ・インターナショナル 代表 森田敦子様
株式会社紅久 代表取締役社長 三浦裕司様
ワルツ株式会社 代表取締役社長 片桐鉄也様
Little by Little 多米530運動部 東陽中学校
和田蒼平様 友永英雄様

【図鑑制作にご協力いただいた皆様】

豊橋総合動植物公園 総合動植物公園長 伊藤紀治様
豊橋総合動植物公園 動植物園長 高見一利様
豊橋市自然史博物館長 吉川博章様
豊橋総合動植物公園の皆様
豊橋市自然史博物館の皆様
愛知教育大学教育学部理科教育講座 准教授
島田知彦様
豊橋市立嵩山小学校様

※図鑑制作にあたり、多くの識者の皆さまに種の同定などにご協力をいただきました。

【編集委員】 ※五十音順

大木伸浩 大谷忠興 大羽利高 兼藤 忍 周布京子 高須大輔
高橋豊彦 戸澤りつこ 友永茂雄 中島由盛 水内伸二

編集後記

創立30周年の記念誌制作を進めていく中で、設立から30年の歴史を学び、「育水」という理念や考え方を改めて学び、先人たちが紡いできた環境づくりという街づくり、人づくりへの熱意、そこから繋がる多様な人たちとのパートナーシップの大切さを深く感じました。そこには、苦悩や絶望や重い決断があったことも安易に想像できます。しかし、志を同じくする者が集えば、必ず道は開けるのだと思います。これからも同じだと思います。

記念誌の「朝倉川の水の育てかた ～朝倉川とともに…子どもたちの体験を持続可能なチカラに… 朝倉川流域ビジョン2025」という長いタイトルは、大谷理事長の肝入りです。全て省くことができない大切な言葉の集合体です。これらの言葉が皆さまの琴線に触れ、私たちの活動にご理解、ご協力をいただければ幸いです。私たちも一歩ずつ確実に歩みを進めて参ります。

この記念誌は、本当に多くの皆様のご協力をもって完成させることができました。心の底から感謝を申し上げます。ありがとうございました。



特定非営利活動法人 朝倉川育水フォーラム
記念誌編集長 副理事長 高須大輔

朝倉川の水の育てかた

～朝倉川とともに…子どもたちの体験を持続可能なチカラに～
朝倉川流域ビジョン 2025

2025年9月19日（「育水の日」）初版発行

【著 者】 特定非営利活動法人朝倉川育水フォーラム
【発行者】 大谷忠興
【発行所】 株式会社豊川堂

〒440-0804 愛知県豊橋市呉服町40
電話 0532-52-2525

【制 作】 株式会社ブレンド・マーケティングデザイン
【印 刷】 株式会社北川印刷

定価は裏表紙に表示してあります。
落丁本・乱丁本はお手数ですが発行所にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

●本書の無断複製（コピー）は著作権法上での例外を除き禁じられています。
また、代行業者等に依頼してスキャンやデジタル化を行うことは、たとえ個人や家庭内の利用を目的とする場合でも著作権法違反です。

©2025 Forum of IKUSUI for the sustainable asakura river
Published by Housendou, INC
Printed in Japan ISBN 978-4-938403-27-0



Forum of IKUSUI
for the sustainable asakura river

No5400882



「育水」のロゴを制作した
デザイン書道家 鈴木愛さん